

平成 24 年度

あうるすぽっとアートマネジメント研修事業報告書

あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）

公益財団法人としま未来文化財団

平成 24 年度

あうるすぽっとアートマネジメント研修事業報告書

はじめに

あうるすぽっとでのインターンシップは今春、これまでで最も多数の8名の第6期生を送り出します。大学学部2年生から大学院生と年齢の幅も広く、先ずは恐る恐るお互いにコミュニケーションを取ることから始まり、事業の実践を重ねて一つのチームとしてまとまりを見せていく様は、同時に一人一人の成長も映し出していました。劇場という現場でスタッフ即ち社会人として働き、学校生活だけでは得られない新たな視点を身につけ、社会に出る者、学校生活へ戻る者、それぞれの新しい春が始まろうとしています。

今年度のあうるすぽっとには大きな変化がありました。開設以来指揮を執ってきた松島規前支配人、稲垣聖一前副支配人、崎山敦彦前チーフ・プロデューサーに代わり、新たに岸正人支配人、石戸谷郁生技術・管理統括、ヲザキ浩実チーフ・プロデューサーへ引き継がれ、新たな体制での始まりの年を迎えたのです。研修生を含めた新旧スタッフが一つ一つの事業に共に取り組むことを通し、短い年月ながらもこれまで積み重ねてきたあうるすぽっとの劇場としての文化、性格、使命を、あらためて皆で検証する1年となりました。その経験を踏まえ、研修の集大成として研修生が自ら企画制作した事業が、衣裳デザイナー池田木綿子さんを講師に迎え、舞台衣装について学んだ「Variety of Costume～プロから学ぶ舞台衣装～」です。事業の目的、対象、内容を時間をかけて話し合い、ダンサーの山田うんさんとカンパニーの皆さんのご協力を得て充実した内容となり、受講者からも好評を得ることが出来ました。直接事業を手掛け、その反響を目の当たりにして得た手応えは、制作過程での困難と相まって、研修生たちに自信を与えたことでしょう。

実はあうるすぽっとアートマネジメント研修では、「アートマネジメントの専門家」を育てるだけでなく「アートのある暮らしを提言できる社会人」を育てることも目的としています。研修を受けた者がすべて専門家にならないかもしれませんが、社会とアートがどのように結びつき、アートがどれだけ社会的役割を発揮し必要とされるのか、各々の研修生が今後の生活の中で自分たちなりに学んだことを生かし、それぞれの立場で還元していってくれることを願ってやみません。

平成 25 年 3 月

あうるすぽっと

目次

I. 教育普及事業

～近藤良平・コンドルズ、池袋大作戦！！池袋の街で大盆踊り大会～「‘にゅ～盆踊り’」	6
熊谷和徳 Tap dance art project 「TAP & African percussion～手と足で奏でるリズムワークショップ～」	10
あうるすぽっと伝統芸能講座「第三回 文楽・素浄瑠璃ワークショップ」	12
海外で活躍するろうのアーティスト南村千里による「からだでコミュニケーション」	14
視覚障害者の舞台鑑賞を支援するボランティアの育成講座	16
あうるすぽっとプロデュース『白い馬の物語』関連ワークショップ「ものがたりをつくろう！」	18
鴨下信一「日本語の学校」	20
バックステージツアー「あうるすぽっとのウラに何がある!?バックステージのぞきま Show!!」	22
ホワイエリーディング 劇団昴音楽朗読劇『クリスマス・キャロル』	24
あうるすぽっと区民シリーズ ホワイエ展示「桐木憲一『東京シャッターガール』原画&写真展」	26
あうるすぽっと演芸ライブ「講談と浪曲のハナシ」	28
多角的ワークショップ&ライブ「渋さ知らズ de 怖いもの知らズ」	30
あうるすぽっと舞台技術講座「Variety of Costumeープロから学ぶ舞台衣裳ー」	34
あうるすぽっと舞台技術講座「舞台監督の仕事」	36
まちをしる・みる・あるく・かんじてみる「としまっふ計画」	38
豊島区立中央図書館特別展示	40

II. アートマネジメント研修事業

アートマネジメント研修プログラム	46
研修生レポート	48
編集後記	56

I . 教育普及事業

～近藤良平・コンドルズ、池袋大作戦！！池袋の街で大盆踊り大会～

「‘にゅ～盆踊り’」

‘にゅ～盆踊り’は、2008年よりあうるすぽっとと豊島区在住の振付家・ダンサーである近藤良平氏（コンドルズ）が取り組んでいる地域振興のための事業である。池袋西口公園での‘にゅ～盆踊り’大会の開催は、今年で4回目となった。回を重ねるごとに参加者が増え、地域の盆踊り大会として認知されてきている。

大会に先駆けて、今年は豊島区内7会場でワークショップを開催。コンドルズから‘にゅ～盆踊り’を伝授された203名のワークショップ参加者は、盆踊りリーダー（通称‘しゃ～’）として、盆踊り大会で来場者を巻き込む役割を務めた。また今年は雑司ヶ谷鬼子母神盆踊りに出張参加。地元の伝統的な盆踊りが根付く場所での‘にゅ～盆踊り’の紹介が実現した。

開催データ

日程	ワークショップ	2012年7月14日（土） - 18日（水）
	鬼子母神盆踊り出張参加	2012年7月21日（土）
	‘にゅ～盆踊り’大会	2012年7月29日（日）
アーティスト	近藤良平、鎌倉道彦、山本光二郎、藤田善宏、安田有吾（以上 コンドルズ）	
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区	
企画製作	あうるすぽっと	
協力	ROCK STAR、雑司ヶ谷鬼子母神盆踊り奉行会、東京商工会議所豊島支部、池袋西口商店街連合会、豊島区立勤労福祉会館、南大塚地域文化創造館、駒込地域文化創造館、巣鴨地域文化創造館、雑司ヶ谷地域文化創造館、千早地域文化創造館、こまのや、駿河屋、甘美屋、鳥元本店、海畑、deca、シグマコミュニケーションズ	
助成	平成24年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ事業	

アーティストプロフィール



近藤 良平（こんどう りょうへい）・コンドルズ

コンドルズとは男性のみ学ラン姿でダンス、生演奏、人形劇、映像、コントを展開するダンスカンパニー。20ヶ国以上で公演。ニューヨークタイムズ紙絶賛。渋谷公会堂公演も即完超満員。NHK総合「サラリーマンNEO」内「サラリーマン体操」、NHK教育「からだであそぼ」内「こんどうさんちのたいそう」、「あさだからだ」内「こんどうさんとたいそう」、NHK連続テレビ小説「てっぱん」オープニングダンス振付出演、2010年NHK紅白歌合戦にも出場。NODAMAP『パイパー』に振付出演。櫻井翔主演、三池崇史監督『ヤッターマン』の振付も担当。主宰の近藤良平は、朝日舞台芸術賞寺山修司賞受賞。現在、東京都豊島区在住。

ワークショップ

それぞれの会場ごとに参加者を募り、講師が各地域に出向いて、‘にゅ〜盆踊り’を伝授した。今年度は、豊島区内の各地域にある 5 つの地域文化創造館、豊島区立勤労福祉会館に加え、あうるすぽっとを会場としてワークショップを開催。過去最多となる 203 名がワークショップに参加し、大会に向けて盆踊りを習得した。

開催概要

日時／会場	2012 年 7 月 14 日（土）	10:00 - 12:00	あうるすぽっと
		14:00 - 16:00	南大塚地域文化創造館
	2012 年 7 月 15 日（日）	10:00 - 12:00	豊島区立勤労福祉会館
		14:00 - 16:00	巣鴨地域文化創造館
	2012 年 7 月 16 日（月・祝）	14:00 - 16:00	雑司が谷地域文化創造館
	2012 年 7 月 17 日（火）	19:00 - 21:00	駒込地域文化創造館
	2012 年 7 月 18 日（水）	19:00 - 21:00	千早地域文化創造館
対象	年齢、経験不問（ワークショップいずれか 1 会場と 7 月 29 日の本番に参加できる人）		
参加費	1,000 円／豊島区民（在学、在住、在勤）割引 500 円／ 豊島区内在住 65 歳以上の人 無料 おとなのアカデミー実施事業※		
参加者数	203 名		
講師	近藤良平、鎌倉道彦、山本光二郎、藤田善宏、安田有吾（以上 コンドルズ）		

※おとなのアカデミー〜豊島区内在住・65 歳以上の方は無料〜

あうるすぽっとは高齢者の方へ文化芸術面から個性豊かで‘いきいき’とした暮らしをサポートする劇場を目指し「おとなのアカデミー」と称して様々な芸術に触れる機会を提案している。舞台芸術の鑑賞のみならずワークショップやレクチャーなど体験型プログラムを提案し、かつ参加しやすい機会を設けることで、新たな関心や意欲を呼び起こし、地域に心ゆたかな暮らしを普及していくことを目指す。

内容

- ・2 人 1 組でストレッチ
- ・手拍子をとる
- ・手拍子に掛け声をつける
- ・掛け声に合わせて身振りを習得する
- ・2 列になり、向かい合わせで踊る
- ・二重円になり、‘にゅ〜盆踊り’の歌に合わせて踊る
- ・うちわを使ったエクササイズ
- ・コンドルズバンドプロジェクト・ストライクの曲「シャバラ！」に合わせ、‘にゅ〜盆踊り’の振りを応用して踊る



はじめは、拍子とりと掛け声の練習から

撮影：久塚真央



少しずつ身振りを習得

撮影：久塚真央



‘にゅ〜盆踊り’の特徴である二重円

撮影：久塚真央

アンケートより

- ずっと‘にゅ～盆踊り’には、一般参加していましたが、子供が大きくなったこともあり、やっと‘しゃ～’として参加できました。子供も踊りが大好きなので本番も一緒に楽しめます！（20代・女性）
- 昨年はフリを覚えるので精一杯でしたが、今回は他の参加者さんとも楽しく活動できました！（30代・男性）
- 赤ちゃんからお年寄りの方まで、年齢制限なしに楽しく参加出来る踊りだと思う。地域でどんどんこのNEW盆踊りを広めて地域を生き活き、活性化させていきましょう!!（50代・女性）

研修生のノート

‘にゅ～盆踊り’のワークショップは今年で5回目を迎え、リピーターの参加が多くなっている。今年初めてワークショップに参加した人の中には、昨年通りがかりに西口公園での盆踊り大会に参加したという人も多くいて、‘にゅ～盆踊り’に対する関心が着実に広まっていることがうかがわれた。

参加者は、大会前にコンドルズのメンバーから直接に‘にゅ～盆踊り’を教わり、習得することによって、大会本番では自分たちが中心となって盆踊り大会を盛り上げるのだという意気込みをもった。“豊島区の”盆踊りとして、この盆踊りが地域活性の一助となるよう盛り上げていきたいという区民の声も聞かれており、‘にゅ～盆踊り’は、地域住民に主体的に街を活性化しようという意識をもたせることのできるプログラムとして、期待に応えていく必要がある。

雑司ヶ谷鬼子母神盆踊り 出張参加

今年は、雑司ヶ谷鬼子母神盆踊りに‘にゅ～盆踊り’が参加した。鬼子母神の境内に設置された盆踊り会場にて、近藤良平・コンドルズと盆踊りリーダー（ワークショップ参加者）が、鬼子母神盆踊りの来場者を交えて‘にゅ～盆踊り’を踊った。地域の伝統的な盆踊りが根付く場所において、新旧の盆踊りに関心を持つ人々が出会い、交流する場を創出した。

参加概要

日時	2012年7月21日（土）17:15 - 18:00
会場	雑司ヶ谷鬼子母神堂境内
参加者	コンドルズ、ワークショップ参加者のうち希望者

内容

- ・コンドルズとワークショップ参加者による‘にゅ～盆踊り’披露
- ・一般来場者への‘にゅ～盆踊り’レクチャー
- ・一般来場者を輪に加えての‘にゅ～盆踊り’



撮影：久塚真央

研修生のノート

ワークショップ参加者は互いに打ち解けた様子ではあるものの、少々緊張した面持ちで待機時間を過ごしていたが、いざ‘にゅ～盆踊り’が始まると、盆踊りリーダーとして盆踊りを披露した。中盤にコンドルズが来場者に向けて振付けのレクチャーを始めると、盆踊りリーダーたちは遠巻きに見ていた来場者を盆踊りの輪に引き込んだ。伝統的な盆踊り大会に‘にゅ～盆踊り’が出張参加することにより、本プロジェクトを知らない区民にも、新しい盆踊りの楽しみを提供する機会となった。

‘にゅ～盆踊り’ 大会

池袋西口公園に櫓を組み、地元の商店から屋台の出店もあって、本格的な盆踊り会場となった。今年は公園内の噴水を塞いでその上にステージを設置し、その周りにも盆踊りの輪をつくった。盆踊りリーダーが最初につくった盆踊りの二重円は、多くの来場者を巻き込んで、最終的には六重の円になった。

近年の電力事情を鑑みて、今年も投光器を使用した自家発電による‘エコモード’で実施。また被災地に対する義援金を募ることを目的としたチャリティーでぬぐい‘てにゅ～ぐい’の販売も継続して行った。

開催概要

日時	2012年7月29日(日) 17:30 - 20:00
会場	池袋西口公園
来場者数	約3,800名
出演	コンドルズ、ストライク、タマル、和服散歩の会・知紫会



事前に‘にゅ～盆踊り’を習得している‘しゃ～’は目印となるステッカーを着物に貼った

撮影：久塚真央



撮影：久塚真央

内容

- ・タマルブレイブ
- ・和服散歩の会・知紫会
東京音頭、炭坑節の伝授、披露
- ・高野之夫豊島区長挨拶
- ・コンドルズバンドプロジェクト・ストライク
ライブ
- ・‘にゅ～盆踊り’



タマルによるブレイブ

撮影：久塚真央



知紫会による盆踊りの伝授

撮影：久塚真央



ストライクによるライブ

撮影：久塚真央

研修生のノート

来場者の増加による混雑が懸念されたが、噴水周りにも盆踊りの輪を増やしたことと、ステッカーをつけた盆踊りリーダーが、輪に加わる来場者の整理に協力したことにより、大きな混雑は起きなかった。しかし、近所の商店から騒音やゴミの片付けについて指摘を受けた。これらについては来年以降の課題として対策を考える必要がある。

‘にゅ～盆踊り’は、人気のコンテンポラリーダンサーの近藤良平、コンドルズを講師としており、遠方からの参加者が豊島区を訪れる機会をつくっている。地域の恒例行事として期待が大きくなってきていることを自覚し、来年度以降も区内外の人々の出会いの場を創出することが求められる。

熊谷和徳 Tap dance art project

「TAP & African percussion ～手と足で奏でるリズムワークショップ～」

タップダンサー熊谷和徳、アフリカンパーカッション奏者 Latyr Sy、TAPPERS RIOT を講師に迎え、子どもを中心としたワークショップを開催した。今回は“リズム”をテーマに、タップダンスとアフリカンパーカッションの共演を実施。参加者はそれぞれタップダンス・パーカッションのセクションに分かれ作品作りに取り組んだ。ワークショップの後、チャリティトーク・ミニライブでワークショップの成果を発表。自らの手と足で音を出し、踊ること・演奏することの楽しさを体験するだけでなく、プロと同じ舞台に立つ機会を得ることで舞台により親しみを感じてもらうことを目指した。

開催データ

日時	2012年8月7日(火) 14:00 - (本番 19:00 開演)
会場	あうるすぽっと劇場
対象	Kids クラス：小学生、Adult クラス：中学生以上
参加費	1,000 円
参加者数	Kids クラス 10 名 (タップ 8 名、パーカッション 2 名) Adult クラス 22 名 (タップ 18 名、パーカッション 4 名)
アーティスト	熊谷和徳、Latyr Sy、TAPPERS RIOT
主催	あうるすぽっと (公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
企画製作	あうるすぽっと

アーティストプロフィール



熊谷 和徳 (くまがい かずのり)

15歳でタップを始め19歳で渡米。ニューヨークを拠点に活動し「日本のグレゴリー・ハインズ」と評される。NY タップフェスティバルには、9年連続で出演。日本では、金森穰、森山開次などのダンサー、また、日野皓正、上原ひろみ、ハナレグミをはじめ様々なミュージシャンとのコラボレーションを実施。現在はNYと日本を拠点にソロ活動、自身のリーダーバンド「K. K. QUINTET」でのライブなど精力的に活動している。また、ライブ活動に加え、子どもや初心者を対象としたワークショップなど、タップの楽しさを多くの人に広める活動にも取り組んでいる。

Latyr Sy (らていーる しー)

セネガルゴレ島出身。10歳からアフリカドラムを演奏し始める。1998年、トラディショナルパーカッションバンド「Africa Djembe」を結成し、ソリスト、リードボーカル、リーダーとして活動。1995年来日。自らのパーカッショングループ「Africa Sunxelcom」を結成。パーカッションリストとして様々なバンドに参加するかわら、海外での活動も多い。民族音楽・ラテン・ジャズ・ロックから日本の古典芸能に至るまでの幅広いジャンルで演奏し、アフリカ音楽と文化の普及を目的として活動している。

TAPPERS RIOT (たっぱーず らいおっと)

(村田正樹、谷口翔有子、加藤信行、安達雄基、米澤一平、米澤一輝、石垣うたこ)

TAP DANCER 熊谷和徳の公演『TAPPERS RIOT』(2006年)をきっかけに集い、公演・ライブ・ワークショップを行う。2007年からこれまでに全国各所でワークショップを実施。2009年8月青山円形劇場『TAPPERS RIOT Vol2』6DAYS2009年12月神楽坂 Session Houseの公演、2010年より市民参加型の公演なども行い、タップダンスの楽しさを多くの人に伝えている。

ワークショップ

内容

・ウォーミングアップ

基本的なステップを行なった。ステップを踏みながら動いたあとは、パーカッションの音・歌に合わせて踊りに挑戦。慣れてきたところでタップのテクニックを使って音を出す。

音に合わせて動くこと、音を出す楽しさを体感した。

・グループ分け、参加者自己紹介

・グループ練習

タップのセクションは舞台上でグループごとに練習。パーカッションのセクションは楽屋にて叩き方のレクチャーを受けた。

・リハーサル



タップのセクションはグループごとに異なる振付を教わり、それぞれの音の違いを楽しんだ



別室にて、パーカッションの指導の様子
持ち方・叩き方など基礎から教わった

アンケートより

■ (参加者にとって) ほぼ身一つ、こんなに短い準備練習時間で舞台をつくりあげてしまう技にいつも感動してしまいます。パーカッション、歌、tap danceのミックスがこんなに盛り上がるとは! (40代・女性)

■ 時間が短く食事もとれづらかったのでキツかった。もう少しゆとりが欲しい。パーカッションはきちんとやろうと思うとかなりレベルが高くてムズかったがノリで楽しくやれた。(40代・男性)

チャリティトーク&ミニライブ

ワークショップで作った作品を発表するチャリティ公演を開催した。参加者は講師とともに舞台に立ち、3時間の練習の成果を披露した。また熊谷和徳とラティール・シーのセッションやトークコーナーも実施。終演後は一昨年起こった東日本大震災復興のためのチャリティ募金を呼びかけた。

開催データ

日時	2012年8月7日(火) 19:00 -
会場	あうるすぽっと劇場
入場料	無料
来場者数	80名



撮影：久塚真央

研修生のノート

初心者から経験者、子供から大人まで様々な人々が入り混じったワークショップとなった。実際に自分で音を出すことで、踊ること・演奏することの楽しさを体感できていた。今年は短時間で行われたため、参加者にとってはハードなワークショップとなってしまったようだ。プロのタップダンサーと同じ舞台上に立てるという魅力を残しつつ、普段運動を行なわない人にも無理のないようなプログラムを組む必要がある。

チャリティトーク&ミニライブでは踊り・演奏の楽しさを知ると同時に、多くの人と一つのステージを作りあげ、発表する面白さを共有する機会となった。また、今までは客席側にいた参加者が舞台にあがる経験をすることで、舞台芸術への関心をより深めるきっかけとなった。

「第三回 文楽・素浄瑠璃ワークショップ」

日本を代表する伝統芸能を気軽に体験できる機会を提供している「文楽・素浄瑠璃ワークショップ」は、今回で3回目の実施となる。本ワークショップは、素浄瑠璃の実演、解説、参加者が語り体験するコーナーで構成される。文楽ファンにも文楽初心者にも文楽・素浄瑠璃を身近なものに感じられるプログラムとなっている。

今回は劇場ホワイエに、太夫が使う見台や床本、三味線を自由に触れられるコーナーを設置し、太夫、三味線により親しむための貴重な機会を提供した。

開催データ

日時	2012年 9月 4日(火) 19:00 - 21:00
会場	あうるすぽっと劇場
参加費	3,000円/豊島区民(在住、在学、在勤)割引 2,500円/ 豊島区内在住 65歳以上の人 30組 60名招待 ※おとなのアカデミー実施事業 詳細P7
参加者数	192名
講師	竹本相子大夫(人形浄瑠璃文楽座・太夫)、鶴澤清植(人形浄瑠璃文楽座・三味線)
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
企画製作	あうるすぽっと、劇書房
協力	人形浄瑠璃文楽座むつみ会

今回の演目：「仮名手本忠臣蔵 - 三段目(殿中刃傷の段)」

講師プロフィール



竹本 相子大夫(たけもと あいこだゆう)

1974年大阪府堺市生まれ。奈良教育大学進学後、箏曲部に籍を置き、文楽と出会う。97年四世竹本相生大夫に入門、文楽協会研究生となる。98年国立文楽劇場『小鍛冶』のツレで初舞台。2000年五世竹本伊達大夫の門下となる。2009年九代竹本綱大夫(現・竹本源大夫)の門下となる。本公演の合間を縫って、文楽の普及や振興のために自主公演やワークショップなどの活動を精力的に行っている。



鶴澤 清植(つるさわ せいき)

1980年大阪府大阪市生まれ。6歳から半太夫節を伝える菊棚月清に地唄を習う。93年鶴澤清治に入門。96年文楽協会研究生となる。99年国立文楽劇場『良弁杉由来・桜宮物狂いの段』のツレで文楽初舞台。2003年より「文楽若手による義太夫節を聴く会」を開催。祖父は文楽三味線の二世鶴澤道八、伯父は現師匠の鶴澤清治、兄は豊竹咲甫大夫という文楽の家系に生まれ、幼少期より文楽三味線弾きを意識した環境の中で育ち、他の道は考えたことがないという。



普段客席からは見られない道具をスライドに映して紹介

撮影：久塚真央

内容

第一部

・技芸員による素浄瑠璃の実演

今回の演目は、「仮名手本忠臣蔵 - 三段目〈殿中刃傷の段〉」。数多くの忠臣蔵物の中でも、きわめて上演数が多く、人気の高い「仮名手本忠臣蔵」。〈殿中刃傷の段〉は、高師直が塩谷判官を切りつける事件に至るまでの、二人の次第に切迫する状況を描く。

第二部

・文楽座の紹介、太夫と三味線が用いる道具の解説

・参加者が太夫の語りに挑戦

スライドに映した台詞を見ながら、太夫の手本に倣って参加者全員が大きな声を出して語った。



ホワイエに設置した体験コーナーでは、参加者が自由に舞台に上がり、床本に触れたり、三味線をひくことができる

アンケートより

- キャラクターの入れ変わりに付いて行くのが大変でした。解説を受け、実際に「ふし」を体験してみて音と合わせる大変さ、プロの技術の素晴らしさに感動しました。(20代・女性)
- 伝統芸能の中でも文楽は触れる経験が少なく、こういった素浄瑠璃の講演も初めてでしたが、義太夫の語りと三味線のみで語られる物語の表情の豊かさと臨場感に驚きました。機会があれば文楽の公演も一度観てみたいと思いました。(30代・女性)
- 初歩の知識から分かり易く説明していただきよかったです。最後の「浄瑠璃を語ろう」は面白かった。(40代・男性)

研修生のノート

素浄瑠璃を間近に見て、太夫と三味線のみで生み出される風景や人間関係のドラマにのみこまれる。このような経験をできる場は稀少ではないだろうか。

今回の演目は「仮名手本忠臣蔵・三段目〈殿中刃傷の段〉」。参加者は節のつけ方や息の長い台詞に苦労しつつも、みな大きな声を出して、素浄瑠璃を楽しんだ。そして改めて技芸員の生み出す臨場感、奥行きに驚いていた。

文楽は日本が誇る伝統芸能のひとつであるが、能や歌舞伎と比べると、実際に触れられる場所が少なく、知らない人も多いのが現状である。しかし今年度は、社会的に話題に取り上げられたことで、多くの人の関心をひいた。「文楽」という名前は耳にしても、実際には見たことがない人に対しても文楽・素浄瑠璃に気軽に触れられる機会があることを知らせるべく、図書館や区の掲示板での広報活動に積極的に取り組んだ。その結果、初めての参加者も多く集まった。参加者のなかには今回素浄瑠璃の楽しみ方を学んだので今後も文楽を鑑賞していきたいという声も聞かれた。

地域の公立劇場であるあうるすぽっとが、日本の伝統文化に直接触れ、体験する機会を創出していることの意義は大きい。多くの人に親しまれる伝統芸能のプログラムを組み、身近に触れる機会があるという情報を提供することに、継続して取り組む必要がある。

海外で活躍するろうのアーティスト南村千里による

「からだでコミュニケーション」

アートを通じた教育プログラムの普及を目指し、ろう学校に通う子どもたちを支援する NPO 法人大塚クラブと協力して行なったワークショップ。今年は海外を中心に活躍するプロの振付家・ダンサーであり、自身もろう者である南村千里氏を講師に迎えた。また、ろう学校に通う子どもの他に健聴者の子どもからも 3 名の応募があった。子どもの身体表現活動に興味のある大人の参加者も募り、合計 16 名で作品づくりに取り組んだ。ワークショップではこの参加者一人ひとりがそれぞれの異なる創造性を引き出し、表現力豊かな体の動きを学んだ。最終日にはあうるすぽっとの劇場でワークショップの成果を発表した。

ワークショップ 開催データ

日時／会場	2012 年 10 月 29 日 (月) 11:50 - 12:35、13:35 - 14:20	大塚ろう学校 体育館
	2012 年 10 月 31 日 (水) 13:00 - 15:00、15:30 - 17:00	大塚ろう学校 会議室、体育館
	2012 年 11 月 21 日 (水) 15:30 - 17:00	大塚ろう学校 体育館
	2012 年 11 月 28 日 (水) 15:30 - 17:00	大塚ろう学校 体育館
	2012 年 12 月 4 日 (火) 14:00 - 16:00、16:00 - 17:30	あうるすぽっと劇場
対象	ろう学校に通う小学 3 年生から 6 年生、子どもの身体表現活動に興味のある人	
参加費	子ども 無料／大人 3,000 円	
参加者数	10 月 29 日 3・4 年生 25 名、5・6 年生 18 名／10 月 31 日 保護者 21 名／ 11 月 21・28 日、12 月 4 日 子ども 12 名、大人 4 名	
アーティスト	南村千里 (演出)、村木充 (音楽)、高橋陽子 (アシスタント)	
主催	あうるすぽっと (公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区	
企画製作	あうるすぽっと、ミューズ・カンパニー	

アーティストプロフィール

南村 千里 (みなみむら ちさと)



生後 7 ヶ月目に聴力を失い、きこえない世界へ。1999 年 Laban、2003 年横浜国立大学大学院修士課程修了。2003 年に英国に移住するまで、日本での代表的なダンスアートワークに、谷川俊太郎氏との共同制作「誌とダンスと谷中キッズ」(art Link 上野—谷中 2001 参加企画、ミューズ・カンパニー・プロデュース)、千葉大学企画検見川アートプロジェクト 2001+2002 参加作品、川崎市多摩区企画中高生のミュージカル、東京藝術大学先端芸術表現科/IMA の非常勤講師としての演習作品の振付などがある。2003 年より 2006 年末まで、英国の CandoCo Dance Company のダンサー／指導者として参加。現在、フリーランスアーティストとしてロンドンを拠点に、アジア、アフリカ、欧米など 15 ヶ国 35 都市以上で公演、振付、ワークショップを実施。昨夏、ロンドンパラリンピック開会式でパフォーマーとして出演。英国テイト・モダン、テイトブリテンで英国手話による作品解説も手掛けるなど多彩な活動を実施中。



大きな輪を作りアイデアを膨らませた

内容

- ・自分のポーズをつくって自己紹介
- ・アイコンタクトを使ったゲーム
- ・講師の合図にあわせて空気の流れを表現
- ・何の動物の真似をしているのか当てるゲーム
- ・グループで大きな動物を表現

アンケートより

- さんかしてたくさんあそびをかさねてダンスがとてまたのしくなりました。これからもさんかをしたいとおもいます。(9歳・女性)
- ろう学校の方とコミュニケーションがとれてよかったです。そして手話も学べてよかったです。(9歳・女性)
- コミュニケーションのとりかた、作品のつくり方など勉強になりました。(30代・女性)

発表会 開催データ

日時／会場	2012年12月4日(火) 17:30 - 18:00	あうるすぽっと劇場
入場料	無料	
来場者数	46名	
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区	
企画製作	あうるすぽっと、ミューズ・カンパニー	



舞台上で講師とミーティング

アンケートより

- 音と動きの流れが別の世界へいざなってくれました。(無記入・女性)
- 3回の練習で、とてもすばらしい物が出来ていて感動しました。(30代・女性)

研修生のノート

今年には健聴者の子どもからも3名の応募があり、講師やろう学校の子どもたちに手話で自己紹介をするなど積極的にコミュニケーションを図る様子が見受けられた。序盤はペアを組む際などに同じ学校の子どもたちで固まってしまう傾向があったが、回を追うごとに打ち解け、学校という垣根を越えて共に作品づくりに取り組むようになった。まだ幼い子どもたちにとって、障害者と健常者の触れ合いや交流はそれぞれの成長の契機となる機会になっていた。また、講師は参加者たちの目を見つめ、自らの言葉で指示を与えていた。相手に気持ちを伝え、体全体を使って自分自身を表現することの楽しさを教わったワークショップであった。

視覚障害者の舞台鑑賞を支援するボランティアの育成講座

豊島区が2007年から取り組み、2011年よりあうるすぽっとも企画制作に加わるようになった「視覚障害者の舞台鑑賞を支援するボランティアの育成講座」は、視覚障害者の方々が舞台芸術を楽しむためのサポートをするボランティアの育成講座である。様々な文化活動を通じて地域コミュニティ活動の担い手となり、地域活性化への推進力となる文化ボランティア活動のきっかけを提供するとともに、主体的な文化ボランティア活動、ボランティア同士の交流や、情報共有のネットワーク化などを支援する取り組みである。今年度は劇場フロントスタッフの仕事全般を体験する機会が増え、介助ボランティアに必要な、劇場内の仕事についても学ぶことができた。

開催データ

日時／会場	第1回 2012年9月28日(金) 19:00 - 20:30 第2回 2012年10月5日(金) 12:00 - 16:00 2012年10月7日(日) 11:00 - 15:00 第3回 2012年10月21日(日) 15:00 - 19:00 2012年10月25日(木) 13:00 - 17:00 第4回 2012年11月16日(金) 12:00 - 16:00 2012年11月18日(日) 12:00 - 16:00	あうるすぽっと会議室A あうるすぽっと劇場 あうるすぽっと会議室A、劇場 東京メトロ有楽町線東池袋駅構内 あうるすぽっと劇場 東京メトロ有楽町線東池袋駅構内
対象	福祉・ボランティアに興味関心のある人	
参加費	1,500円	
参加者数	16名	
講師	第1回 門田恭子(劇場サービスプランナー) 第2-4回 菅谷ひとみ、田中光里(劇場で出会うハートライン※)	
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区	
協力	演劇企画JOKO、劇場で出会うハートライン、アトリエ・ダンカン、セブン・ティアーズ ※劇場で出会うハートライン：演劇鑑賞の支援団体	

内容

第1回 講義・実習「劇場フロントスタッフの仕事とは」

第2回 劇場フロントスタッフの仕事見学／あうるすぽっとプロデュース公演『季節のない街』観劇

第3回 講義・実習「視覚障害者の劇場介助」「介助基本姿勢」

会議室にて2人1組のペアを組み、ペアのうち一人がアイマスクを着用し、もう一人が介助する練習を行った。その後、劇場や東池袋改札前通路に場所を移し、実際の介助状況に近い形で同じ練習を行った。

第4回 あうるすぽっとプロデュース公演『白い馬の物語』での介助実践



ボランティアの心得や基本姿勢、注意事項を講師から解説



会議室内でペアを組み、講師から歩行介助の方法を学ぶ



東池袋駅での歩行介助実習の様子



劇場内での座席案内実習

アンケートより

- 介助を実践して、初めてわかることも多かった。実践に移るまでは、とてもこわかった(緊張して)。貴重な体験をさせていただき、とても良かった。目の見えない方にも楽しめる観劇はとても良いと思う。
- 第3回の講義で道の案内先等を細かく(それでもごく一部だと思いますが)教えて頂きましたが、第4回で実際にご案内してみると全く勝手が違い焦りました。ご一緒に来ている介助者の方の案内の仕方など失礼ながら、参考にさせていただきました。

研修生のノート

参加者の大半はボランティア活動や障害者の支援に関心がある方で積極的に取り組んでいた。同時に、舞台に関心がある方も多くおり、第1回目の「劇場のフロントスタッフの仕事とは」の講義内容が参考になったという声が多く聞かれた。この講義は劇場のフロントスタッフの仕事やあうるすぽっとの劇場そのものを知ってもらおうという点においても良い機会であった。

第3回においてはハートラインの方と参加者との活発な質疑応答が見られ、第4回の実践に向けての意欲を感じる場面であった。

実践では、講義だけではわからない「実践して初めて分かること」を参加者、研修生ともに実感した。その実践を通し参加者からは、介助の自信が付き、さらに次に参加するボランティアや自分の仕事にも役立てたいという声があがった。文化ボランティアの人材育成の場として今後も続けて行いたい講座である。

あうるすぽっとプロデュース『白い馬の物語』関連ワークショップ

「ものがたりをつくろう！」

あうるすぽっとプロデュース公演『白い馬の物語』の上演に伴い、モンゴルの移動式住居「ゲル」をハワイエに設営し、その中でワークショップを行なった。実物の「ゲル」に触れ、馬頭琴の演奏に耳を傾けながら参加者が「ものがたり」を創作。想像力を膨らませ、アイデアを出し合いながら、ひとつの「ものがたり」をつくりあげた。できあがった「ものがたり」を実際に参加者が演じることで、‘人との触れ合い’‘家族’‘出会い’について考えた。

開催データ

日時	2012年11月17日(土) 11:00 - 12:30
会場	あうるすぽっとハワイエ
対象	小学生(保護者の参加も可)
参加費	無料
参加者数	20名(小学生)、14名(保護者)
講師	島守辰明、ネルグイ・アシト(馬頭琴、ホーミー)
主催	あうるすぽっと、豊島区
企画製作	あうるすぽっと
助成	財団法人地域創造、平成24年度文化庁地域発・文化創造発信イニシチアチブ事業

アーティストプロフィール



島守 辰明 (しまもり たつあき)

東京都生まれ。京都外国語大学在学中から演劇をはじめ、舞台、映像に出演。同時に舞台演出もおこなう。2003年4月～18年3月、文化庁在外研修生としてロシア国立モスクワ・マーレイ劇場及び附属シェーブキン演劇学校にて研修。2006年、兵庫県立ピッコロ劇団入団。日本演出者協会会員。



ネルグイ・アシト

モンゴル国立馬頭琴オーケストラメンバーの馬頭琴、ホーミー奏者。「文化芸術功労章」、「優秀青年」金メダルを受賞。2010年・全国ホーミー歌手コンクール第1位入賞。



ゲルの中にはモンゴルの写真が飾られている



ゲルの中で馬頭琴を聴きながら「ものがたり」の登場人物を想像する



できあがった「ものがたり」を演じてみる

内容

- ・ゲルの中に入り、外からの馬頭琴の音色に耳を傾け、そこから物語に登場する人物を想像
- ・ゲルから出て、想像した人物たちの物語を作り上げ、体を使って演じる
- ・それぞれの印象に残った場面や人物を絵に描く

アンケートより

- 今日やってみたことをおうちでやってみたいです。(7歳・男性)
- いめいじすることがむずかしかった。(7歳・男性)
- (難しかったことは?) 曲のイメージにあわせてものがたりを考えた所(11歳・女性)
- 想像がステレオタイプ化しそうになるのをいかに自由な発想に持っていくか。(40代・男性)
- 大人になるとなかなか音楽を聞いて場面を想像するのは難しいです。(40代・女性)
- 家で子供と物語づくりをしてみたいです。何でもお話しありでいいんだ〜と当たり前ながらに気付きました。(40代・女性)

研修生のノート

ゲルという狭い空間で初対面の参加者同士が「ものがたり」を創作することができるのか不安を感じていたが、狭い空間に集まったからこそその一体感が生まれていた。講師である島守氏からの問いかけに、子どもたちは当初なかなか発言できないようだった。しかし「ものがたり」が出来上がっていくにつれて、新しいアイデアがどんどん出てくるようになり、積極的に発言し、役を演じることを楽しんでいた。また、実物を間近で見ることによって、ゲルや馬頭琴への興味がわいたという声もあり、異文化への興味を持つきっかけとなった。

参加者がアイデアを出し合うことで「ものがたり」が予想もしなかった展開をみせることに面白さを感じた。自由に想像することや発想を共有しあうことの楽しさを体感できるワークショップであった。

鴨下信一

「日本語の学校」

演出家鴨下信一による、日本語の多様な表現を深く理解するための朗読ワークショップを開催。文字に書かれた言葉を「どのように声に出して読めば良いか」を基本テーマとし、今回はそれに加えて朗読を通して自己の内面と向き合うことを目標としている。参加者は中勘助の『銀の匙』と複数の作家による詩20篇をテキストに用いて、日本語の特性や機能性、奥深さについて考えた。

開催データ

日時	2012年12月1日(土) 11:00 - 17:00 2012年12月2日(日) 11:00 - 17:00 2012年12月8日(土) 11:00 - 17:00 2012年12月9日(日) 11:00 - 17:00 2012年12月15日(土) 11:00 - 17:00 2012年12月16日(日) 12:00 - 18:00
会場	あうるすぽっと会議室B
対象	高校生以上、日本語によるあらゆる表現を目指す人 ワークショップ全日程(6回)に参加できる人
参加費	16,000円
参加者数	33名
講師	鴨下信一
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
企画製作	あうるすぽっと、劇書房

講師プロフィール



鴨下 信一 (かもした しんいち)

1935年、東京都生まれ。1958年、東京大学美学科卒業後、TBSに入社。ドラマ、音楽など多くの番組を演出。主な作品に「岸辺のアルバム」「ふぞろいの林檎たち」「高校教師」「渡る世間は鬼ばかり」など。また、舞台の演出家としても評価が高く、特に白石加代子の『百物語』『源氏物語』は、朗読を見事な一人芝居に高めた画期的な作品として注目を浴びている。

内容

参加者はそれぞれの担当するテキストを順に朗読していき、鴨下氏が一人一人に指導を行った。アクセントなどの間違いから、間の取り方や音の強弱についてまで細かなアドバイスをしていた。また、他の参加者の朗読を聴くことも、自分自身へのヒントとなり良い刺激となっていた。

鴨下氏は朗読の上達のためには、技術面だけでなく、自分の声と向き合い内面を見つめ直す必要があると説いていた。今回のワークショップでは全6回とも「参加者が一人ずつテキストを読む」というシンプルな方法で一貫していたが、鴨下氏の指摘や解説は徐々に高度になっていき、参加者も日を追うごとに朗読のスキルを上げていった。



鴨下氏は多様な話で参加者を惹きつけていた



参加者は講師からのアドバイスを熱心に聴いていた

アンケートより

- 自身がいかにか作品への敬意と読み込むことを忘れていたか気付かされました。逆に不安に思っていたことや、自信の無いことを先生にしっかり切っていただけたことが心の鎖をといたように思えます。(20代・女性)
- 昨年よりは少しは成長したのではないかと思っていたが、受講してみて自分自身の知識のなさを痛感した。しかし、自分の知っていることを使って解決する方法もあることを教えていただき、少し安心もした。(50代・男性)
- 自分の声を客観的に捉えられました。また、他の方の読みを聞き、その先生の評を自分の感想と合わせてみることで、教える立場としての勉強になりました。(50代・女性)
- 様々な方の朗読と個人個人へのアドバイスの中に自分自身へのヒントが盛り込まれていることに改めて気づかされています。文章のニュアンスと自分の声のバランス等以前にも言ってくださっていたことばかりと思うのですが改めてうなづくことばかり。(50代・女性)

研修生のノート

過去に参加経験のある参加者が多く、レベルの高い内容であった。鴨下氏からの指導を受けて繰り返し読むうちに、参加者たちが確実に上達していることを聴いていて実感できた。個人的に指導を受けられる時間は短かったにもかかわらず上達が見られたのは、他の参加者の朗読やそれに対するアドバイスを聴くことでも、多くを学ぶことができたからであろう。私自身も「良い朗読」は早くスラスラ読むことではなく、アクセント、音の高低や強弱、間の取り方を重視して丁寧に読むことだと参加者の朗読を聴いて実感した。

また、技術面だけの指導ではなく、自分の声をしっかり聴くことで自己の内面と向き合い、より深く「朗読」について考え追究するワークショップであった。参加者から「自分を見つめ直すきっかけとなった」という声もあり、目的を達せられたのではないかと感じた。

鴨下氏の「ここで学んだことを正しく伝えて、正しい朗読を継承してほしい」という言葉から、この場だけで完結するのではなく、得た知識や技術を今後活かすことが求められていた。朗読を指導する立場の参加者もおり、教える側の指針ともなる内容であった。

バックステージツアー

「あうるすぽっとのウラに何がある バックステージのぞきま 〇 」

普段、客席からでは覗けない舞台の裏側や劇場の仕組みを体験するあうるすぽっとバックステージツアー。今回は世界各国で活躍するマイムユニット・CAVA (サバ) のパフォーマンスとバンド・大福による生演奏を交えて劇場内を案内した。これまでのバックステージツアーとは異なり、キャストがパフォーマンスをしながらの劇場ツアーであり、最後にはマイム体験と発表も行った。

開催データ

日時	2012年12月10日(月) 14:00 - 18:00 -
会場	あうるすぽっと劇場
参加費	無料
参加者数	31名(14:00 - 12名、18:00 - 19名)
アーティスト	CAVA、大福
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
企画製作	あうるすぽっと、CAVA

アーティストプロフィール

CAVA (サバ)

マイムパフォーマンスユニット。黒田高秋、藤代博之、丸山和彰により2003年結成。2008年より細身慎之介、田中優希子が加わり、見た目も性格もデコボコな5人で活動中。マイムをベースにダンス、演劇の要素を融合した無声映画を彷彿とさせるパフォーマンスを東京を拠点に発信し、イギリス、オーストラリア、韓国など世界各国の演劇祭でも公演を行う。また劇場公演以外でも、美術館、結婚式などへの出張パフォーマンス、子どもから大人までを対象とした身体表現ワークショップの開催、2011年にオープンした日清カップヌードルミュージアムでは発明をテーマにした、線画アニメーションとコラボした映像が常設展示されるなど「創る、楽しむ、繋がる」をモットーに活動している。シルク・ド・ソレイユ登録アーティストも在籍。

大福 (だいふく)

熊坂義人により2010年1月結成。11月のブルガリア公演を経て、12月から本格的にソロユニットとなる。リーダーの熊坂義人(cbs)は2009年10月頃までフリーミュージシャンとして活動。忌野清志郎、細野晴臣、梅津和時、おおはた雄一、鈴木惣一郎、ハンバートハンバート、BE THE VOICE等、共演者多数。HONZI(v1)、スパン子(acc)と結成した「福」では2006年にノルウェー公演を成功させる。ASA-CHANG&ブルーハッツのメンバーとして富士ロックフェスティバル2007に出演。2009年10月以降は、フリーで活動中。今回のあうるすぽっとバックステージツアーでは、スパン子、バックキー(sax)の3人で演奏した。

内容

・ホワイエパフォーマンス

参加者がホワイエで待機する中、アコーディオンの演奏とともに案内役が登場。マイムでジョークを交えながら、諸注意を説明する。

・パフォーマンス見学と班分け

CAVA と大福によるステージパフォーマンスを下手袖より少し見学したのち、パフォーマーの自己紹介。その後、赤と緑の2グループに分かれてツアースタート。

・楽屋見学&マイム体験、ステージ発表

赤チームはマイムを体験。パフォーマンスの中に出てきた銅像と強風の中新聞を読む市民を演じる。よりリアルに見える身体や小道具の使い方を学ぶ。

緑チームは舞台裏へ。楽屋や備品の説明だけでなくパフォーマーによる寸劇が入り、参加者を楽しませた。両チームが劇場に戻り、マイムパフォーマンスをそれぞれ発表、鑑賞した後に交代する。



舞台裏をパフォーマーが案内

撮影：久塚真央



銅像マイムの足の動かし方を学ぶ

撮影：久塚真央

アンケートより

■物語がとても良い話で、観客が参加しているのを見られてとても楽しかったです。舞台裏も初めてみたので、とても興味深かったです。(30代・女性)

■バックステージツアーという説明を受けるものだけと思っていたが、寸劇あり、ワークショップありの盛りだくさんの内容で非常に嬉しい思いをした。ぜひ次回も参加したい。(20代・男性)

■めっちゃ楽しかったです。舞台裏にも色々な仕掛けがあったのに驚きました。とても素敵なイベントだと思います。劇団の人のファンになりました。(30代・女性)



参加者も舞台上でパフォーマンス

撮影：久塚真央

研修生のノート

平日の昼の参加者は育児中の母親や大学生、夜は仕事帰りの20代30代がほとんどであった。マイムパフォーマンスを演じている様子を見られ、またワークショップも含んだ新しいバックステージツアーだった。マイム体験以外にも参加者を楽しませる工夫がされており、舞台裏の説明を聞くだけでなく、舞台裏で実際におこりそうなマイムパフォーマンスが始まり、参加者の笑いを誘う場面が多くあった。

マイム体験のワークショップの中で、舞台に立ったことは参加者にとって印象深い経験となっただろう。

『クリスマス・キャロル』

昨年度に引き続き、今年度も『クリスマス・キャロル』を劇団昴によるリーディング（朗読劇）として開催した。舞台上には椅子と小道具のみが置かれ、それらを組み合わせて様々なシーンを表現するなど面白みのある演出がなされていた。また劇中で来場者参加型の「YES・NO ゲーム」が行われるなど、来場者は出演者との距離を近くに感じながら観劇することができた。

開催データ

日時	2012年12月24日（月・祝）14:00 - 25日（火）13:00 -
会場	あうるすぽっとホワイエ
入場料	無料
来場者数	313名（12月24日 212名、12月25日 101名）
演出	河田園子
出演	金子由之、鳥畑洋人、市川奈央子、染谷麻衣、三輪学、加賀谷崇文、高木裕平（以上 劇団昴） 上田亨（ピアノ演奏）
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区
企画製作	演劇企画 JOKO
協力	劇団昴

プロフィール

劇団昴（げきだんすばる）

劇団昴は文京区千石にあった三百人劇場を本拠地とし、1976年第1回公演アルベール・カミュ作『カリギュラ』から始まり2006年『八月の鯨』に至るまで、30年間に110本以上の演目を上演。代表作として、『セールスマンの死』『クリスマス・キャロル』『アルジャーノンに花束を』『チャリング・クロス街84番地』等。2006年末の三百人劇場閉館に伴い、「劇団昴一般社団法人」として池袋に事務所を移し、和洋新旧問わず優れた演劇作品の上演を続けている。

『クリスマス・キャロル』あらすじ

クリスマス・イブの夜、ケチで頑固な老人スクルージは7年前に死んだ同僚マーレイの亡霊と過去・現在・未来の精霊たちに導かれ、時空を超えた不思議な時間を過ごす。

そこで彼が見たものは、孤独な老人スクルージが過ごした青年時代、スクルージが気付かずにいた温かな家族の営みや愛情、そして未来に待っている恐ろしい出来事……。すべての時間が過ぎた後に訪れる一人の老人の心の再生——人間への慈しみにあふれた物語。



椅子を組み合わせることで様々な場面を演出



会場全体があたたかな雰囲気につつまれていた



ピアノの生演奏によりクリスマスのムードが高まる



ティムを囲む、貧しくも明るいクラチット一家

アンケートより

■舞台演劇と異なる企画だったが、かえってかたにはまらずに鑑賞できました。ピアノの BGM が良く楽しむことができました。精霊の登場&朗読も工夫があってわかりやすかったです。(60代・女性)

■あうるすぽっとでこのクリスマスキャロルを観るたびに、「今年ももうすぐ終わるなあ」と思える様になる程、暮れの演目として定着する位の回数をこれからも重ねていってほしいと思います。バレエ公演でもテープで流す近年、生演奏での音楽付きでお芝居が観れる幸せを感じました。(40代・男性)

■原作に忠実な部分も多く、それでいてテンポの良い流れで面白かったです。特に、Yes・Noゲームにお客さんを参加させるのは楽しくてとても良いと思いました。(20代・男性)

研修生のノート

老若男女、幅広い年齢層の観客が来場した。初日はクリスマス・イブと休日が重なったこともあり、開場前から行列ができ、ホワイエが埋め尽くされるほどの盛況だった。

クリスマスの物語やピアノの生演奏で、ホワイエ全体があたか特別な空間と化した。物語や空間を共有する喜びを、多くの人に味わってもらえたと思う。アンケートも全体的に満足度の高い結果であった。

来場者が公演を知った広報媒体として、公益財団法人としま未来文化財団の広報誌やあうるすぽっとのホームページに加え、図書館や館内のチラシラック、あうるすぽっと劇場での他公演の折込など、施設内でチラシを手にとった来場者が多かった。今後はより広範囲の人にあうるすぽっとに来てもらうため、劇場外の近隣地区への広報により力を注いでいくのも良いのではないかと感じた。

あうるすぽっと区民シリーズ ホワイエ展示

「桐木憲一『東京シャッターガール』原画&写真展」

街歩き漫画『東京シャッターガール』の主人公・夢路 歩が訪れた街を、28名の写真家が撮影。それぞれの視点でとらえた写真を原画とともに展示。豊島区にちなみ、トキワ荘通りなど区内で撮影された作品も並べた。

開催データ

日時	2013年1月5日(土) - 2013年1月14日(月・祝) 12:00 - 19:00 (最終日 18:00まで)
会場	あうるすぽっとホワイエ
入場料	無料
入場者数	667名
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
企画製作	あうるすぽっと

東京シャッターガール



©桐木憲一

写真部に所属する女子高生の夢路歩(ゆめじ あゆみ)が、東京の隠れた名所や撮影スポットを訪れて、そこで出会った人々と触れ合いながら、情感のこもった風景をフィルムに収めていくショートコミック。

作者プロフィール

桐木 憲一(きりき けんいち)

漫画家。山口県萩市出身。1993年週刊少年ジャンプ第36回赤塚賞準入選。2010年7月、週刊漫画ゴラクにて「東京シャッターガール」連載開始。本作8話でトキワ荘を題材とした事がきっかけで、豊島区の地域文化活動「トキワ荘通り協働プロジェクト」に参加。都電荒川線を扱った回は「東京新聞 ON Web “都電荒川線100周年記念ページ”」のHPに掲載。



会場入口にはコミックス第2巻の表紙ポスターと桐木憲一氏のコメント



主人公が訪れた街を追体験するような展示



写真家によって展示の形式は様々



豊島区にちなんだ写真展示



『東京シャッターガール』の原画



複製原画展示

研修生のノート

漫画のストーリーに合わせて写真を配置し、主人公とともに各地を巡っているような展示であった。若手漫画家の桐木憲一氏は、地域に根差した活動を行なっていて、豊島区との関わりも深い。今回の企画展示のように、作品を通じて多くの人に豊島区を知ってもらうきっかけ作りを今後も行っていきたい。

あうるすぽっと演芸ライブ

「講談と浪曲のハナシ」

日本の伝統話芸「講談」と「浪曲」をそれぞれ一席ずつ気軽に楽しめる無料ライブ企画。2013年春に真打昇進が決定している注目の講談師、一龍齋貞橋をはじめ、浪曲師に玉川太福（第一回出演）、東家一太郎（第二回出演）という、新鋭の浪曲師を出演者として迎えた。昨年度に引き続き、出演者が話芸の魅力について語るトークコーナーとして、「講談と浪曲のあれこれ」を設けた。

開催データ

日時	第一回 2013年1月7日（月）19:00 - 第二回 2013年2月17日（日）14:00 -
会場	あうるすぽっと劇場
入場料	無料
来場者数	第一回 151名、第二回 224名
出演	第一回 一龍齋貞橋（講談）、玉川太福（浪曲）、玉川みね子（曲師）、一龍齋貞寿（前講） 第二回 一龍齋貞橋（講談）、東家一太郎（浪曲）、大久保美（曲師）、宝井琴柑（前講）
主催	あうるすぽっと（公益財団法人としま未来文化財団）、豊島区

出演者プロフィール

講談師：一龍齋 貞橋（いちりゅうさい ていきつ）

大学在学中の2000年、一龍齋貞水門下に入門。2006年二ツ目昇進。講談定席の本牧亭をはじめ、都内演芸場へ出演。「新鋭講談会」や、毎月開催の「貞橋勉強会」など、活躍著しい注目の若手講談師。講談教室や司会、はとバスの史跡ツアーなど活躍の場を広げている。2013年春、真打昇進。講談協会所属。

浪曲師：玉川 太福（たまがわ だいふく）

2007年、二代目玉川福太郎門下に入門。浅草木馬亭に毎月出演のほか、居酒屋、カフェなど様々な場所で浪曲会を開催している。「忠臣蔵」などの古典演目を勉強しつつ、「自転車水滸伝〜ペダルとサドル〜」など自作の新作浪曲にも取り組んでいる若手浪曲師。日本浪曲協会理事。

曲師：玉川 みね子（たまがわ みねこ）

二代目玉川福太郎との結婚を機に、曲師・山本太一に師事。福太郎の相三味線を長年つとめる。現在は、一門の弟子はもちろん関東節・関西節を問わず、さまざまな演者の曲師として活躍している。「浪速十八番」（NHK-FM）出演。日本浪曲協会理事。

浪曲師：東家 一太郎（あずまや いちたろう）

2007年、二代目東家浦太郎門下に入門。毎月出演の浅草木馬亭や、毎週公演の田原町浪曲協会広間での「浪曲火曜亭」をはじめ、師匠、東家浦太郎の会、自身の勉強会などで活動している若手浪曲師。古典だけに留まらず、「一太郎の浅草案内」など自作の新作も披露している。日本浪曲協会理事。

曲師：大久保 美（おおくぼ みつ）

東家浦太郎の会で初めて浪曲に触れ、節に合わせて情景や感情を巧みに表現する浪曲三味線の魅力に惹かれ、曲師の道へ。伊丹秀敏師に師事。「人の心を魅了する師匠の至芸を目指して勉強中」の、最若手の曲師。



張扇を叩く軽妙な音が会場に響いた

撮影：久塚真央

アンケートより

■前回、「講談のハナシ」を見ました。とても面白かったので、しかも今回は未知の浪曲もプラスされていたので興味津々でした。浪曲の「うなり」、しかも現代に近いものだったのが意外で逆に面白かったです。貞橋さんはまた腕を上げたのでは？真打昇進おめでとうございます。

■はじめて聞きましたが、お話がおもしろく、夢中に聞いてしまいました。プロとしてではなく、趣味として習ってみたいです。

■初めての人なら、もっと詳しく解説が必要。

■落語に比べて接する機会の少ない講談、浪曲を聴かせる好企画。

■講談・浪曲ともに大変楽しく聴かせて頂きました。こうした催しを、しかも無料で企画してくださるというのはとてもありがたいことだと思います。豊島区の方のお心意気に感謝致します。夜の時間の開催というのも、仕事の帰りにも伺うことができとても嬉しく思います。また是非こうした企画をお持ちくだされば、ありがたく存じます。



トークコーナー「講談と浪曲のあれこれ」

撮影：涌井直志

研修生のノート

来場者の年齢層は第一回、第二回ともに高めであった。また、両方の回に来場した人も多く、伝統話芸への興味・関心の高さを窺い知ることができた。今後は若者を中心に積極的にアプローチを行ない、日本の伝統話芸の魅力を広く深く伝えていきたい。アンケートには本事業の継続を望む声が多く寄せられた。堅苦しいイメージを取り払い、誰でも気軽に参加できるような工夫も継続していく必要がある。

多角的ワークショップ ライブ

「渋さ知らズ e 怖いもの知らズ」

音楽の演奏のみならず白塗り、ダンス、巨大な舞台美術などの要素を組み合わせることで極めてユニークなパフォーマンスを生み出してきた『渋さ知らズ』。本ワークショップは参加者がメンバーとの共同作業を通して、『渋さ知らズ』が持つパフォーマンスの創作過程を体験する試みである。参加者は美術班、白塗り班、パフォーマンス班、ゴージャス班、音楽班の5つに分かれ、講師と共にアイデアを出し合いながらライブ本番に臨んだ。

開催データ

日時	2013年1月16日(水) - 20(日)
会場	あうるすぽっと
対象	美術班：絵心のある人、舞台美術の興味のある人 ダンス・白塗り班：舞踏、白塗りに興味がある人 ダンス・ゴージャス班：ダンスに興味がある人、ライブ当日に衣裳を準備できる人 ダンス・パフォーマンス班：目立つ格好で出演できる人 音楽班：渋さと一緒に作曲・演奏したい人
参加費	1,000円(全コース共通)※製作・衣裳にかかる費用は別途
参加者数	52名
アーティスト	美術班：横沢紅太郎、青山健一、オノアキ、竹内寿一 ダンス・白塗り班：若林淳、松原東洋、長谷川宝子、霧村佳広、南加絵 ダンス・ゴージャス班：さやか、ペロ ダンス・パフォーマンス班：青山健一、渡部真一、広田清子、板垣あすか 音楽班：渋さ知らズメンバー
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
企画製作	あうるすぽっと、渋さ知らズ、
助成	平成24年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ事業

アーティストプロフィール



撮影：山下恭弘

渋さ知らズオーケストラ (しぶさしらずおーけすとら)

1989年、老舗アングラ劇団「発見の会」の劇伴(劇中生音楽)を演奏するため結成。同年にダンサーチームも現れ、多様な表現を確立。海外で高い評価を受けつつ、2001年に行われた『Fuji Rock Festival' 01』への参加とレコーディングライブを経て作成されたアルバム『渋旗』の発表で、日本国内での知名度が一気に向上。2006年にはベストアルバム『渋全』にてメジャーデビュー、2012年初のカバーアルバム『渋彩歌謡大全』をリリース。

ワークショップ

スケジュール

	参加人数	1/16(水)	1/17(木)	1/18(金)	1/19(土)	1/20(日)
美術班	6名	オリエンテーション	9:00-21:00	9:00-21:00	9:00-21:00	9:00-21:00
ダンス・白塗り班	12名		19:00-21:00	16:30-21:00	13:00-21:00	13:00-21:00
ダンス・ゴージャス班	4名					
ダンス・パフォーマンス班	12名					
音楽班	18名					

内容

【美術班】

- ・打ち合わせによりワークショップでの創作物を、本番時に劇場内を練り歩く巨大なドラゴンと舞台のバトンに吊るすUFOに決定
- ・材料となるダンボールや紙などを収集
- ・集めた材料でドラゴンとUFOを創作
- ・創作したドラゴンの中に入って、劇場内を練り歩く練習

【ダンス・ゴージャス班】

- ・舞台上で自分を美しく見せるコツのレクチャー
- ・指先まで神経を集中させるストレッチ
- ・楽曲に合わせたダンス練習
- ・本番の衣裳、髪型、メイクの決定及びその創作

【音楽班】

- ・各自持ってきた楽器の音出し
- ・いくつかのチームに分かれてセッション
- ・全体でのセッションを繰り返し、そこからオリジナルの曲を創作
- ・渋さ知らズの代表的な楽曲の練習
- ・他の班のパフォーマンスに合わせた楽曲演奏

【ダンス・白塗り班】

- ・自分の呼吸と身体を意識したストレッチ
- ・鏡を使って自分の身体を見ながら、指先まで意識を巡らせるトレーニング
- ・具体的なイメージを持ったまま身体を動かす練習
- ・ライブ本番の振り付け練習
- ・男女に分かれて、白塗りのレクチャー

【ダンス・パフォーマンス班】

- ・話し合いにより、参加者それぞれの特技を生かしたパフォーマンスの決定
- ・本番で使う小道具、衣裳の創作
- ・楽曲に合わせたダンス練習
- ・菊池寛の「父帰る」を台本にした朗読劇の練習



ドラゴンの胴体を創作する美術班



布を電飾に見立て、振り付けを練習する白塗り班



鏡を使ってポーズを練習するゴージャス班



劇場で音出しを始める音楽班



朗読劇「父帰る」を練習するパフォーマンス班

『怖いもの知らズ前夜祭』

今年度はライブ本番の前日19日(土)の夜に、ワークショップ参加者の成果発表を兼ねた『怖いもの知らズ前夜祭』を開催した。この『怖いもの知らズ前夜祭』は講師陣が舞台上に登場せず、参加者のみが出演したライブである。参加者は自分たちの力で前夜祭を乗り越えることにより、舞台上での成功や失敗を経験し、そこから翌日の本番に向けての改善点を考えることができた。

開催データ

日時	1月19日(土) 19:30 -
場所	あうるすぽっと劇場
入場料	無料
来場者数	28名
出演	ワークショップ参加者



出番の前に鏡の前で衣裳を整える
ゴージャス班



音楽班の演奏に合わせ、ダンス各般が練習してきたパフォーマンスを披露



美術班が創作したドラゴンを開演前のホワイエに設置



パフォーマンス班による朗読劇「父帰る」の発表

アンケートより

- とても楽しかったです。ワークショップで制作した曲があのまま発表なしだと散漫になるところでしたが、本番があることでぐっとしまってクオリティも上がり、良くなったと思います。(音楽班、50代・男性)
- 講師の方がいらっしゃらないため(出演されないため)、とても緊張しました。ですが、本番(日曜)に向けてのよい練習になったと思います。前夜祭がなければ、本番訳が分からず終わってしまったかと思っています。“余裕”(といっても、本番あがっていましたが…)をつくれたよい機会だったと思います。(ゴージャス班、20代・女性)

渋さ知らズオーケストラ公演『池袋大作戦!!』

ワークショップ最終日、渋さ知らズオーケストラとワークショップ参加者が5日間のワークショップの中で作りあげてきた様々なパフォーマンスを思う存分披露する場として開催した渋さ知らズオーケストラ公演『池袋大作戦!!』。参加者は『怖いもの知らズ前夜祭』での経験を糧に、自分たちのパフォーマンスをさらに磨きライブ本番に挑んだ。本番はワークショップの中で練習してきたパフォーマンスを舞台上で発表することに留まらず、開演前のホワイエやエレベーターホール前での演奏やパフォーマンス、舞台上でのマイクパフォーマンス、映像とのコラボレーションなど、舞台芸術の多様性に富んだライブとなった。



美術班が製作したドラゴンが登場

開催データ

日時	2012年1月20日(日) 17:00 -
会場	あうるすぽっと劇場
入場料	一般 3,000円 / 学生 2,000円 / 豊島区民(区内在住、在勤、在学) 割引 2,500円
来場者数	206名
出演	渋さ知らズオーケストラ、ワークショップ参加者、他

アンケートより

■内容の濃い数日間で、参加するたびに学びがあり、いい経験をさせてもらってありがたい。しかも安い!! (音楽班、40代・男性)

■こういったWSに参加するのは初めてで、もちろん白塗りも初めてで貴重な体験ができた。短期間で作品を創るというのはとても大変だったけど、集中して一つになることができた。苦手な”感じる”という分野を今回のWSを通じておもしろいと思えたので、普段から意識をして立ち振るまえたらいいなと思う。機会があればまた白塗りで参加したい!! (白塗り班、10代・女性)



エレベーター前にて朗読劇「父帰る」の発表



出番を待つ白塗り班



渡部真一氏とパフォーマンス班有志による即興のマイクパフォーマンス

研修生のノート

前夜祭に対するアンケートから読み取れるように、今年度取り入れた前夜祭は参加者にとって、本番前に舞台表現を体験できるという点で非常に有意義な企画となったようだ。企画の決定と告知をさらに早めることができれば、来場者数も増し、より効果的な企画になると考えられる。また、ワークショップが進むにつれ初対面の参加者同士で飲みに行くなど、積極的な交流が行われていた。このように人と人が創作活動を通し交流を深めていく場を提供することも公共劇場が持つべき役割の1つである。今回のワークショップはその役割も果たしていたといえるであろう。

参加者の中にはリピーターも増えてきている。さらに認知度を高めることで、この事業が担う役割をより発揮できるようになるのではないだろうか。

「arie of os u e—プロから学ぶ舞台衣裳—」

舞台に関連する仕事の一つである衣裳制作の現場に注目したワークショップを開催した。衣裳に関心を寄せる人を対象に、普段目にする事のないプロの仕事をレクチャー。参加者それぞれの興味を深め、今後のステップアップに繋がることを目指した。

講師には舞台、CM、雑誌等、多様なフィールドで活動するコスチュームデザイナー、池田木綿子氏を迎え、手掛けた作品の画像や衣裳を使用しながら衣裳の創り方や見せ方の違いを解説。6個のテーマを軸にプロの幅広い仕事に触れることで舞台衣裳に対する新たな視点を得た。

開催データ

日時	2013年2月9日(土) 14:00 - 18:00
会場	あうるすぽっと会議室B
参加費	1,000円
参加者数	28名
講師	池田木綿子 (Luna Luz)
主催	あうるすぽっと (公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
企画製作	あうるすぽっと
制作	あうるすぽっとアートマネジメント研修生
協力	Luna Luz、Co. 山田うん
助成	平成24年文化庁地域発・文化創造発信イニシチアチブ事業

講師プロフィール



池田 木綿子 (いけだ ゆうこ)

上田女子服飾専門学校卒業後、2004年よりアシスタントとして活動。2007年衣裳制作事務所 Luna Luz 設立。コンテンポラリーダンス、モダンバレエ、ミュージカル、アーティスト等の衣裳プランの他、TV、広告、書籍等にて、スタイリストとしても活動中。近年の主な衣裳作品として『ミュージカル 忍たま乱太郎実写版』/東京ドームシティー・サンシャインシティー (2010 - 12年)、『家電のように解り合えない』森山開次×チェルフィッチュ / あうるすぽっと (2011年)、『ショーメン 海神楽 ver.』Co. 山田うん (2012年) などがある。



画像と実物を交えながら対談形式で進行



ミュージカル忍たま乱太郎実写版赤壁の衣裳を見せながら原作の世界観に近付けるための工夫を伝える

アンケートより

■素材探しから本番後の洗濯まで、現場を知るはじめての一步を踏み出すようなとても楽しいワークショップでした。「職業病」なるもののお話やダンサーの個性の生かし方の説明では思わずクスリとなっていました。ありがとうございました。(20代・女性)

■『春の祭典』のプロセスがおもしろかったです。ダンサーの方が実際に踊るとコスチュームがどう見えるのか。いろんな角度から観察できました。ありがとうございました！(30代・女性)

内容

- ・ダンスの種類による衣裳の違い
コンテンポラリーダンス、モダンバレエの衣裳の違い
- ・広告とテレビの衣裳
映像作品におけるタレントのイメージづくり
- ・原作がある作品のデザイン
既にデザイン画があるものから衣裳を作ること
- ・衣裳スタッフの現場の仕事
衣裳スタッフが現場で行っている仕事
- ・衣裳のデザインが完成するまで
演出家とのやり取りからデザインを決めていく過程
- ・春の祭典について
Co.山田うん『春の祭典』の衣裳の作成過程
フィッティングの様子



事前に撮影したCo.山田うん『春の祭典』(2013.2.24 /茅ヶ崎市市民文化会館)のフィッティングの様子を上映し、現場の生の声を知った



Co.山田うんのダンサーによる『春の祭典』の実演
実際に踊った際の見え方の変化を学んだ

研修生のノート

舞台衣裳に興味がある人たちに向け、なかなか触れる機会が少ない現場の様子を伝えるワークショップとなった。ジャンルごとに異なる仕事の仕方を知ることによって多面的な理解が促され、参加者の今後の可能性を広げられたのではないだろうか。また、最後に実際にダンサーが踊っている姿を見せることで、それまでの講義内容を体感してもらうことができたようだ。逆に言葉や映像だけでは伝わらない部分はとても多い。実際に足を運んで間近で見ってもらうことの重要性を感じた。

アンケートを見ると参加者は様々なニーズを持ってやってくる事が分かる。多様な要求に応えていく工夫をすると同時に、参加者にいかにワークショップの意図を伝え、それを感じてもらうかが今後の課題である。また、進行役との対談形式が進められたため、どうしても参加者が受け身になってしまっていた。目的を見失わないようにしながら、参加者が主体的に取り組めるプログラムを考えていく必要がある。

「舞台監督の仕事」 ～色の魔術／音のトリック～

舞台芸術分野のプロを目指す学生や、これから中・大劇場へのステップアップを志すスタッフを対象にした舞台技術講座。今年で4回目となる本講座は毎回異なる講座内容を扱っており、今回は色の見え方、音の聞こえ方に焦点を絞って行われた。第一線で活躍する舞台監督・照明・音響の専門スタッフと共に、実際に劇場機構を使つての効果検証やトーク形式の講義が開催され、参加者にとって普段聞けない現場での実情を知る機会となった。

開催データ

日時	2013年2月13日(水) 13:00 - 20:00 (18:00 - 20:00 懇親会) 2013年2月14日(木) 13:00 - 17:00
会場	あうるすぽっと劇場
対象	経験者 ※舞台監督・舞台関係のスタッフとして経験のある人
参加費	1,000円 ※両日参加の場合1,500円
参加者数	2月13日 10名、2月14日 14名
講師	舞台監督：北條孝(ニクステージワークス)、田中伸幸(演劇集団 円)、矢野森一、山中舞 音響：渡邊邦男(新国立劇場)、藤田赤目、上田好生(新国立劇場) 照明：勝柴次朗(LDC-J代表)、原田保(LDC-J)、服部基(LDC-J) 実演：南拓哉(文学座)、福田絵里(文学座)
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
企画製作	あうるすぽっと
協力	澁谷壽久、田中伸幸、福澤諭志、藤崎遊、北條孝、三上司、矢野森一、芳谷研 (公財)新国立劇場運営財団技術部、日本舞台音響家協会、 ライティングデザイナーズクラブオブジャパン、文学座
助成	平成24年度文化庁地域発・文化創造発信イニシアチブ事業

内容

一日目：色の魔術(照明)

・第一部「色の見え方」

照明の基本的な説明の後、灯体にカラーフィルターを入れ混色の見え方を検証した。また様々な色の布に照明を当て舞台上で実際にどのように見えるかを体感した。

・第二部「照明と舞台監督の関わり方」

舞台監督と照明家とのトーク形式で進めた。その後参加者から出た質問に対し、舞台監督と照明家がそれぞれの立場で答えた。

二日目：音のトリック(音響)

・第一部「音とマイクの音像定位」

マイクやスピーカーの名称や特徴を説明した後、実演でマイクの種類の違いや、ディレイなどの効果をつけたときの聞こえ方を検証した。

・第二部「音響と舞台監督の関わり方」

照明編と同じように、参加者が質問できる時間を設けつつ、舞台監督と音響家とのトーク形式で進めた。



講師は参加者から出た質問に対し、それぞれの立場から答えていた

講師プロフィール

北條孝（ほうじょう たかし）

バレエやオペラなどクラシック関係の舞台を経た後、演劇作品やコンテンポラリーダンスを数多く手掛ける。現在、ニクステージワークス所属。

田中伸幸（たなか のぶゆき）

現在、日本舞台監督協会理事、桜美林大学総合文化群非常勤講師。2003年読売演劇賞優秀スタッフ賞受賞。

矢野森一（やの しんいち）

劇団四季演出部を経てパルコ劇場、こまつ座、松竹、新国立劇場等の舞台監督を務める。第二回倉林誠一郎賞受賞。

山中舞（やまなか まい）

多くのオペラの舞台を舞台監督助手として手掛ける。その他、松竹製作「飛龍伝 2010 ラストプリンセス」演出部など。現在フリーの舞台監督。

渡邊邦男（わたなべ くにお）

現在、日本舞台音響家協会理事長、新国立劇場音響課長を務める。

藤田赤目（ふじた あかめ）

現在、日本舞台音響家協会理事、桜美林大学総合文化群非常勤講師、座・高円寺劇場創造アカデミー講師。現代演劇の音響の仕事を手掛ける。

上田好生（うへだ よしお）

現在、新国立劇場技術部職員。日本舞台音響家協会会員。新国立劇場では演劇『リチャード三世』などの音響プランを手掛ける。

勝柴次朗（かつしば じろう）

現在 LDC-J 代表。帝国劇場や宝塚歌劇団公演、博多座、中日劇場、梅田芸術劇場、世田谷パブリックシアターなど、多くの劇場を手掛ける。

原田保（はらだ たもつ）

現在 LDC-J 所属。蜷川幸雄演出作品のほとんどを手掛け、演劇、オペラ、ミュージカル、コンサートなど様々な舞台に携わる。

服部基（はっとり もとい）

現在 LDC-J 所属。演劇、オペラ、ミュージカル、日本舞踊、能の舞台などの舞台を手掛ける。受賞歴多数。平成 22 年、紫綬褒章を受章。

南拓哉（みなみ たくや）

現在、文学座準座員 2 年。『マクベス』俳優座劇場などに出演。

福田絵里（ふくだ えり）

現在、文学座準座員 1 年。『から騒ぎ』俳優座劇場などに出演。



様々な色の布に、実際に照明を当て色の変化を検証した



指向性の違うマイクを比較したり、前後左右あらゆる位置に置いたマイクで音を拾い、聴こえ方の違いを検証した

アンケートより

- 普段音響見習いとして活動しておりますが、マイクに対する知識、また PA の経験がとりわけ浅いため非常に勉強になりました。また周辺のことも取り扱ってくださるので包括的にスキルアップの一助とすることができるかと思います。(20代・男性)
- WSに参加しなくては聞きできないお話や、舞台監督としての工夫、他スタッフとのやり取りの仕方、音響さんに対するの気配りの仕方などたくさんを学べて、とても楽しかったです。今回の WS をきっかけに色々な WS に参加して知識を深めていきたいと思いました。(20代・男性)
- 照明デザイナーの方、音響の方、舞台監督の方が何にこだわり、気にして、お仕事されているのかに興味があり参加しました。音響は特に、何も知らなかったのので、講義を聴いて、とても繊細な変化や音質の違いが体感できてよかったです。(20代・女性)

研修生のノート

多くの専門スタッフの協力を得て、非常に充実した講義となった。両日とも、第一部でレジュメを用いながらの講義と、実際の舞台設備を使った検証、そして第二部では舞台制作における本音トークなどかなり踏み込んだ話を聞くことができた。

今年度は、学生や小劇場で活動している若い世代のスタッフの参加が目立った。プログラムはある程度の知識と経験を前提としたものだったため、そういった参加者が内容についていけないような場面もあったと感じた。講師の方々には自分たちより上の世代に憧れのスタッフがいたようだ。しかし若い世代のスタッフにとって憧れのスタッフというのがなかなかいないのが現状である。今回の講座で、実際にプロとして活躍しているスタッフやその現場の生の声を聞くことで、若い世代のスタッフがさらなる活動のヒントや憧れのスタッフを見つけるきっかけをつかめたのではないだろうか。

まちをしる・みる・あるく・かんじてみる

「としまっぷ計画」

としまっぷ計画とは、公共劇場におけるコミュニケーションプログラムの新しい可能性を模索する、あうるすぽっとと日本大学芸術学部の共同事業である。劇場という建物を飛び出して区内の人々と協力し、毎年様々な企画を通して公共劇場の可能性を探ってきた。4年目を迎える今年度は、これまでの事業を継続して行ないつつ、来年度以降の展望を考える年となった。

今年度製作した『Black Point And Long Line』は、西池袋乱歩通り商店街を舞台とした映像作品である。演劇集団「中野成樹+フランケンズ」に加え映画監督である紺谷昌充氏を迎え、江戸川乱歩（明智探偵）をキーワードに商店街の店舗の協力のもとドラマ仕立の街歩き映像作品を製作することで、街が持つ魅力の発見を目指した。

講師プロフィール



熊谷 保宏（くまがい やすひろ）

1967年東京生まれ。高校教師などを経て、現在、日本大学芸術学部教授。応用演劇研究、演劇教育関連の講座、ゼミナールを担当。各地で各種の演劇上演やワークショップ、アートプロジェクトを展開。著書に『ワークショップで何ができるか』（共著、芸団協出版）。NPO法人スキッツ・プラス監事。小平市在住。



紺谷 昌充（こんや まさみつ）

北海道出身。日本大学芸術学部演劇学科入学とともに上京。大学時代より多くの小劇場に出演。2005年より水戸芸術館プロデュース公演7作品に客演。2007年、自主映画制作を開始。第1回監督作品「フライング・キック」が黒澤明記念SFCにノミネート。2008年には中野成樹+フランケンズ「ちょっとした夢のはなし〈演劇と映画〉」の映画担当として参加。現在も精力的に自主映画を制作している。



中野 成樹（なかの しげき）

1973年東京生まれ。演出家、中野成樹+フランケンズ主宰。演劇活動をはじめたころより、一途に翻訳劇をとりあげる。既存の海外戯曲を、原作のストーリーを守りつつも自由に脚色し、音楽性あふれる構成、シンプルな美術により上演。その手法を、意訳のうえに誤訳でもある「誤意訳（ごいやく）」と呼び、翻訳劇の可能性を切りひらく。中世・近代劇を得意としながら、現代劇へも活動の幅をひろげている。近年では小学校から高校の「演劇」の授業の講師もつとめ、創作の前提となるコミュニケーションの魅力を提示する。2010年、あうるすぽっとプロデュース『長短調（または眺め身近め）』を誤意訳・演出。

中野 成樹+フランケンズ（なかのしげきぷらすふらんけんず）

2003年結成。翻訳劇の上演を専門とする演劇カンパニー。上演作品はあちこちに散りばめられた美術や音楽、そして嘘と本当が絶妙にブレンドされた演技で「ハイセンス」と多くの観客から評される。翻訳劇をわかりやすく味わい深く上演し、古典劇で且つ現代劇な「誤意訳」を伝える。「戯曲のドラマ」「僕らのドラマ」「演劇というドラマ」の三位一体を目指し、演劇の最先端をひたひた歩く。

『Black Point And Long Line』 発表会

商店街内の喫茶店 coffee pub mako にて試写会を開き、関係者に向けて制作した映像作品を上映した。発表会では映像の上映だけでなく、中野成樹氏が制作したスライド紙芝居『魔女の休日』やラブ音楽『蒔屋清一郎』を公開した。また、制作した映像を後日 You Tube で公開し、外部に向けて商店街の魅力を発信した。

『Black Point And Long Line』 あらすじ

その街に住むある人々は、みな同じ身体的特徴を持っていた。まるきり別人のはずなのに、みな首筋に同じようなホクロがあるのだ。奇妙な偶然なのか、それともまさか全員が同じ一人の人間なのか。しかし、だとしたら、一体どうしてそんなことを？ 江戸川乱歩の『怪人二十面相』をモチーフにした短編映像作品。



乱歩通り商店街での撮影風景

開催データ

日時	2013年3月19日(火) 20:00 -
会場	西池袋乱歩通り商店街内 coffee pub mako
監督	紺谷昌充
撮影	八木正純
出演	洪雄大、石橋志保、竹田英司、田中佑弥、小泉真希(ナレーション) (以上 中野成樹+フランケンズ)、池袋乱歩通り商店街の方々
来場者	20名
監修	熊谷保宏
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
企画製作	あうるすぽっと、日本大学芸術学部
協力	池袋乱歩通り商店街、中野茂樹+フランケンズ
助成	平成24年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ事業



発表会の様子

発表会内容

- ・としまっふ計画の概要説明
- ・スライド紙芝居『魔女の休日』の上映と解説
- ・ラブ音楽『蒔屋清一郎』の発表と解説
- ・紺谷昌充監督らによる舞台挨拶
- ・『Black Point And Long Line』の上映

研修生のノート

「いままで乱歩の名前を生かしきれておらず、乱歩の名をかしてくれた乱歩のお孫さんに申し訳ない気持ちがあった。ただ、自分たちだけでは乱歩に関連するイベントすらやるのも難しかったので、このような企画が嬉しい」という商店街長の言葉が非常に印象的であった。この企画は、あうるすぽっとが間に立ち、アーティストと乱歩通り商店街の人々が出会ったことから生まれたものである。商店街長の言葉のように、この企画が商店街の方々に受け入れられたのであれば、公共劇場が持つ人と文化の出会いを提供する場としての機能を、劇場という建造物を越えて果たすことが出来た一つの証になると言えるであろう。また発表会は、来場者同士で話をする場面も多くみられ、地域コミュニティーの役割も果たしていたと言える。

豊島区立中央図書館特別展示

あうるすぽっとと同じライズアリーナビル内に豊島区立中央図書館がある。2009年度より、中央図書館のスペースにおいて、あうるすぽっととアートマネジメント研修生が毎月特別展示を行なっている。

この展示では、劇場あうるすぽっとでの上演作品やワークショップ事業に関連した書籍を紹介している。図書館の来館者に対して、あうるすぽっとのプログラムを紹介するとともに、多様な視点で芸術や文化を楽しむ機会を提供した。

池袋の街を踊りでジャック！！コンドルズと「‘にゅ～盆踊り’」

7月

関連事業：～近藤良平、コンドルズ、池袋大作戦！！池袋の街で大盆踊り大会～「‘にゅ～盆踊り’」



「‘にゅ～盆踊り’」に関連づけた企画。日本の伝統的な祭りや世界各国のダンスに関する資料、またワークショップ講師の近藤良平氏やコンドルズの著書を取り揃えた。

展示パネルは赤、青、黄などの原色を使用し、特徴的なポーズのシルエットを作成することで子ども達も興味・関心を引けるように工夫した。今後は利用者がシリーズ物で巻数の多い資料も手取りやすくするために、各巻の概略をパネルに展示するなどの工夫をしたい。

シャルル・ペローと童話

8月

関連事業：あうるすぽっとプロデュース公演『親指こぞうーブケッティーノ』



あうるすぽっとプロデュース公演『親指こぞう』に関連づけた企画。観客がベッドに横たわり、物語や効果音に耳を傾けるという演出であったことから、読み聞かせに向けた絵本を選書した。また『親指こぞう』の作者であるシャルル・ペローの童話だけでなく、グリム童話やマザーグース、お伽話の本を取り揃えた。

図書館展示がきっかけで公演に来場した人も多く、効果的な展示ができた。シャルル・ペローの本に限らず、読み聞かせの本など貸出数が増えており、展示目的に沿う結果となった。

文楽と『忠臣蔵』

9月

関連事業：あうるすぽっと伝統芸能講座「第三回 文楽・素浄瑠璃ワークショップ」



「文楽・素浄瑠璃ワークショップ」に関連づけた展示。文楽そのものに関する書籍と、公演で上演される『忠臣蔵』を題材にした書籍を中心に取り揃えた。その他歌舞伎や古典芸能の書籍も選書した。展示パネルは文楽公演で使用される三色縦縞の定式幕を元に作成し、人目を引くようにした。

貸出実績を見ると文楽の入門書、『忠臣蔵』のテーマにした書籍の貸出数が増えている。今後は、日本の古典芸能全体にも興味を持てるような展示を試みたい。

季節のない街の世界 文芸×演劇

10月

関連事業：あうるすぽっとプロデュース公演『季節のない街』



あうるすぽっとプロデュース公演『季節のない街』に関連づけた企画。原作の山本周五郎、演出・脚本を手掛ける戌井昭人の作品を中心に取り揃えた。また戌井氏のように、作家としても活躍する劇作家による作品や、作家を題材した戯曲を併せて取り揃え、小説と演劇の垣根を超えた内容を目指した。

本展示がきっかけで公演を観た図書館来館者がおり、効果を実感した。

少年の成長物語

11月

関連事業：あうるすぽっとプロデュース公演『白い馬の物語』



展示期間中の公演『白い馬の物語』のベースとなった、モンゴルの民話『スーホの白い馬』を中心に構成した展示。本作品では友情や困難に立ち向かう強さを、少年スーホの成長を通して描いている。このテーマに沿って絵本や児童書、またモンゴルに関する書籍を選書した。

モンゴルに関連する書籍の貸出数が増加していたことから、異文化に興味を持つきっかけを創出できたと実感した。

関連事業：バックステージツアー「あうるすぽっとのウラに何がある!?バックステージのぞきま Show!!」
 ホワイエリーディング 劇団昴朗読劇「クリスマス・キャロル」



バックステージツアーとホワイエリーディングは、劇場を普段とは異なる目線で楽しむプログラムである。本展示では、劇場に対する新たな視点が増えることを狙い、劇場で働く人や機構に関する書籍を選書した。図書館の来館者が、同じ建物内にある劇場として、あうるすぽっとを身近に感じられるよう、略式の劇場の平面図、断面図を作成し、展示した。

比較的、面積の大きな書籍が多く、展示パネルが埋もれてしまい、展示の狙いを表現しきれなかった。

あうるすぽっと×JAZZ

関連事業：あうるすぽっとプロデュース公演『Once Upon a Time...あの頃の歌』



おとなのヴィンテージミュージック『Once Upon a Time...あの頃の歌』に関連づけた展示。ジャズの歴史や、日本のジャズ界を牽引してきた音楽家について書かれた著書を中心に選書した。同時開催の「和田誠ポスター展」にも関連し、和田誠の著作も揃えた。展示はシンプルなデザインで、高齢層に向けて“JAZZ”という単語が目立つようにした。

和田氏の書籍の貸出数が増えたことから、和田氏のイラストが表紙になっている書籍を平置きに展示した効果があったと思われる。

東京シャッターガール

関連事業：あうるすぽっと区民シリーズ ホワイエ展示「桐木憲一『東京シャッターガール』原画&写真展」



展示期間中ホワイエで開催された、「桐木憲一『東京シャッターガール』原画&写真展」に関連付けた企画。“写真”“東京”という言葉タイトルに用いた実用書や雑誌、単行本などを広く取り揃えた。

左面に“写真”に関連した本を揃え、実際の写真の撮り方やカメラについての本を並べ、右面に“東京”に関連させた街歩きの本などを並べた。チラシのイメージに合わせて、ピンクでシンプルなパネルを展示した。

区民シリーズの展示に関連して行ったため注目度の高い特集となり、前年比3倍以上の貸出率を達成した。

原爆を作った男たち

2月

関連事業：劇団昴公演『イノセントピープル』



劇団昴『イノセントピープル』に関連づけた展示。物語のテーマでもある原爆開発につながる内容の書籍を中心に選書した。また日本からの視点も対比して取り入れ、原爆投下の様子や記録が収められている書籍も並べた。がれきの形をした文字や戦闘機の絵のパネルを用いることで、戦争を連想させる展示を行った。

東日本大震災の原発事故のことは記憶にまだ新しく、原子力について改めて考える機会を提供できたのではないだろうか。

講談・浪曲ってナニ？

2月

関連事業：あうるすぽっと演芸ライブ「講談と浪曲のハナシ」



「講談と浪曲のハナシ」に関連付けた企画。同じ伝統話芸である落語に比べ、講談・浪曲はあまりよく知られていない。そこで初心者向けの書籍や内容に興味を持ちやすい書籍を中心に選書を行なった。パネルは分かりやすくテーマを表示するとともに、扇のイラストを掲示することでイメージしやすいように工夫した。

貸出数は前年度との比較で6倍になっており、図書館利用者に新たな興味を抱かせる契機になったと考えられる。

記憶と風景

3月

関連事業：あうるすぽっとタイアップ公演『LAND→SCAPE/海を眺望→街を展望』



タイアップ公演『LAND→SCAPE/海を眺望→街を展望』に関連付けた展示。テーマを“記憶と風景”と設定し、風景写真や風景画などを中心に選書した。また当作品が北九州を舞台にした作品であることに関連し、北九州についての書籍もいくつか取り揃えた。レイアウトは、単語や記憶に関する文章をちりばめつつ写真中心にした書籍を目立たせることで展示のテーマを利用者に印象付け、少しでも公演に興味を持てるよう工夫した。

Ⅱ. アートマネジメント研修事業

アートマネジメント研修プログラム

舞台芸術分野の第一線で活躍するクリエイターや劇場の運営スタッフと共に、現代演劇・舞踊を中心とした舞台芸術の創造及び公共劇場が担うべき教育事業に関わりながら、劇場の管理・運営・事業について学ぶプログラム。また、文化政策の知識を劇場運営や各事業の現場で実践的に活用するための特別講習も行なった。

開催データ

期間／場所	2012年6月3日(日) - 2013年2月28日(木) あうるすぽっと 他
対象	舞台芸術分野や文化行政分野でのキャリアを志す東京都内・近県の大学生、大学院生他
研修形態	原則として週2~4日程度。講習、公演日等は夜間研修有
主な業務	①舞台制作補助業務 ②教育普及プログラム(ワークショップ等)の制作業務 ③広報宣伝業務 ④劇場管理運營業務
参加費	50,000円
研修生数	8名
主催	あうるすぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)、豊島区
監修	片山泰輔(静岡文化芸術大学文化政策学部教授)

講師プロフィール



片山 泰輔 (かたやま たいすけ)

應義塾大学経済学部卒。東京大学大学院経済学研究科後期博士課程単位取得満期退学。三和総合研究所主任研究員等を経て現職。日本文化政策学会理事長、日本アートマネジメント学会関東部会長、一般社団法人浜松創造都市協議会理事長。専門は財政・公共経済、芸術文化政策。1995年、芸術支援の経済学的根拠に関する研究で日本経済政策学会大会50周年記念学会賞(奨励賞)受賞。2007年、著書「アメリカの芸術文化政策」で日本公共政策学会学会賞(著作賞)受賞。

特別講習

研修では、現場での体験だけでなく、アートマネジメント研修生を対象とした特別講習が開かれた。今年度6月の「劇場法」制定により大きく変わっていくであろう我が国の公共劇場及び文化政策のあり方を多様な考え方や事例から見つめ、課題などを取り扱うことで、研修生が今後のアートマネジメントに必要な幅広い知識を獲得することのできる講習となった。

第1回 2012年8月11日(土)「日本の文化政策の歴史と特徴」

講師 片山泰輔

内容 明治維新から現代までにおける日本の文化政策の移り変わりとその特徴について

第2回 9月21日(金)「自治体文化政策と公立文化施設1」

講師 片山泰輔

内容 我が国における文化施設の特徴、及び指定管理者制度が持つ特徴と課題について

第3回 9月22日(土)「自治体文化政策と公立文化施設2」

講師 片山泰輔／八巻規子・池田高志(豊島区文化商工部文化デザイン課)

内容 ①2013年6月に成立した劇場法の内容と今後の課題について
②豊島区の文化政策とそこにおけるあうるすぽっとの位置付けについて

第4回 11月18日(日)／11月19日(月)「財政と芸術文化：税金を使う根拠」

講師 片山泰輔

内容 ①経済学(財政学)における政府の役割について
②芸術文化における税金の使われ方について

第5回 12月15日(土)「アートマネジメントとは」

講師 片山泰輔

内容 ①アートマネジメントの定義と具体的な内容について
②非営利産業の経営について

第6回 2013年2月3日(日)「非営利組織のマネジメント」

講師 中尾知彦(慶應義塾大学准教授)

内容 マーケティング理論から見た非営利組織団体の現状や運営方法について

第7回 2月3日(日)「指定管理者制度の現状と課題」

講師 桧森隆一(嘉悦大学副学長、一般社団法人指定管理者協会理事長)

内容 具体的な事例から見る指定管理者制度の現状と課題について

第8回 2月23日(土)「イギリスにおける文化プロジェクト」

講師 湯浅真奈美 (ブリティッシュカウンシル アート部長)

内容 イギリスにおける芸術支援と文化プロジェクトについて

研修生レポート

とびこんでみた劇場インターン

私にとってダンスを踊ることや観ることは、人生から切り離せない重要な要素だ。そのため劇場は幼い頃からとても身近な存在だった。大学進学を考えたとき、またその先の就職を考えたとき、劇場に関わる仕事に当たり前のように興味を持っていた。そのとき見つけたのがあうるすぽっとのインターン募集のチラシ。先輩からの推しもあって、「劇場で長期間インターンができるなんて、こんな機会はなかなか無いから飛び込んでしまえ！」という勢いで、劇場で働くということについて右も左も分からないまま面接を受けに行ったのを覚えている。

この9ヶ月で得た経験、知識は山ほどあった。社会人としてのマナー、メールの書き方、電話の取り方、仕事の引き継ぎ、文章の書き方、劇場でのお客さまの誘導など、当たり前のことであっても学生として普通に生活しているだけでは知り得もしない事ばかり。さらに事業に関わってくると、どこから手をつけたらいいのか分からない。何をするために何が必要でいつまでにやらなければいけないのかを、自分の頭で考え、自発的に動き、職員の方に教えていただいたり、インターンのメンバーに相談しながら、劇場での仕事というものをひととおり経験することができた。はじめは手探りだったが、段々と広報やワークショップ運営など重要な仕事を任せられていくなかで、本気で考え試行錯誤をして問題を解決していくという、仕事をする上で重要なプロセスを実際にやりながら学ぶことができた。次々に積み重なっていく業務をやり遂げながら、どうしたら見に来てほしい観客層に情報が届くのか、目的と意義を考えながら動くことは大変だったし、やりきれなかった点であるかもしれないが、嬉しい成果や反応が返ってきたときは、それを肌で感じることができ、やった業務が観客や参加者に届いているという実感が持てた。

そのような様々な業務の中でも特に印象に残っているのは折込チラシに奔走したり、仮チラシのデザインをしたことである。

あうるすぽっとで行う公演やワークショップのほとんどはチラシによる広報活動を行っていた。今まで観客として公演やライブに行くときに受け取っていたあのチラシが、折り込む側に立つと「これほどまでにお金と労力をかけて行っていることなのか」とはじめは驚いた。来てほしい観客層が集まりそうなイベントや公演を探し、連絡先を調べ、あうるすぽっとの一員として電話をかける、交渉する、チラシを印刷したり用意をする、実際に足を運んで折込作業をしたり郵送して折り込んでもらう。なるべく多くの人に知ってもらうために、この工程を地道にそして素早く行うことが求められた。また、折込チラシだけでなく区内の掲示板に貼りに行ったり、居酒屋やライブハウス、劇場などにチラシを置いてもらったりした。ここで出会った人や場所、そしてこのノウハウを今後、活かしていけたらと思う。

仮チラシをいくつかデザインさせてもらったことも大きな経験だった。「つくってみたい」とは言ったものの校正用語やレイアウトのルールなど何も知らなかったが、何度も訂正を入れてもらっては直し、勉強しながら完成することができた。ようやくデータが完成して、大量に印刷され使われているのを見たときはとても達成感を感じた。

さらに、興味を引かせるための文章の書き方や、ケーティングの用意など、現場にいないければ経験できず今後にも繋がることをたくさん学ばせてもらった。

もちろん足りなかった部分は沢山あっただろう。学生生活を送りながらインターンをするということは決して容易ではなかったが、学業にインターンにと、あっという間の9ヶ月間だった。あうるすぽっとの職員が楽しそうに仕事をしている姿を近くで見ることができ、これから先、劇場に関わる仕事に就けなかったとしても、そんな社会人になれればと思った。

秋山 きらら（あきやま きらら）

立教大学現代心理学部映像身体学科 2年



考え続けた9ヵ月間

私は幼い頃から続けてきた踊りの勉強が出来るという理由だけで現在の大学に入学した。大して舞台芸術の知識があるわけでもなく、ただ何となく勉強をしていたためか、次第に今後に対する漠然とした不安を感じるようになった。大学では勉強という名目で踊りと関わっていけるが、社会に出た途端何の繋がりもなくなってしまうのではないかと。そんな時に偶然「アートマネジメント」という言葉を知った。社会がどのように舞台芸術と向き合っているかなど考えたことがなかった。そんな世界があるのなら、今後も踊りと関わっていける可能性を見つけられるかもしれない。ただそれだけの想いで、アートマネジメントに関してアの字すら知らない状態で飛び込んだのがあうるすぽっとのインターンシップだった。

あうるすぽっとでの9ヶ月間は、ちょうど3年次から学芸員の授業が始まったこともあり、授業で理論づけられたことを実際の現場で体験することの繰り返しだった。扱うジャンルは全く違うが、芸術をマネジメントし公共に対しての使命を果たす、という根本的な部分では同じである。そこに片山先生の講義も加わり、私の中で大きな学びに繋がっていった。現場に出ることの重要性と、一学生でありながら現場に関わらせてもらえることの有難さを感じる毎日だった。

その中でもインターン生企画である「Variety of Costume—プロから学ぶ舞台衣裳—」の制作をさせてもらったことは、私にとって大変貴重な経験であった。ワークショップまでの慌ただしい日々の中、常に求められたのは何故？という問いかけに対する答えだ。何故今このワークショップを行うのか、何故この文でこの言葉を選んだのか、何故この流れにしたのか——公共の資金を使って芸術を提供すること、公共劇場の役割、芸術そのものの価値について熟考させられた。

そうしたなか、一つのワークショップを作り上げる大変さはもちろんのこと、公共劇場の役割を保ちつつ参加者のニーズを把握し、企画にしていくことの難しさに頭を悩ませた。また、責任者として7人をまとめていかなければならなかったが、上手くコミュニケーションが取れないたび自分の力不足を痛感させられることとなった。頼りない主担当であったにも関わらず、皆が最後までついてきてくれたことには本当に感謝したい。この企画はインターン生8人、そして職員の皆様の協力がなければ成し遂げることが出来なかつただろう。チームの力というものを改めて噛みしめた経験である。

多くの方にご迷惑をかけつつご協力を頂きつつ、何とか全てを終えた時、9ヶ月間行ってきた業務が急に立体的に見えた。それ以来、全ての物事における意図、理由、目的が現実味を持って“すとん”と思考の中に降りてくるようになった。我ながら随分と遅ばせながら、アートマネジメントの本質的な理解（の恐らく入口）にたどり着くことが出来たのだ。視野が広がったあの感覚を、これからも忘れないようにしていきたい。

さて、私は長い間、好きなことならどんなに辛くても頑張る事が出来るものと考えていた。しかしダンスをはじめ、舞台芸術に関わり、仕事としていくにはそれだけでは務まらない。芸術が人々にどのような意味をもたらすのか、どのような価値を与えるのか、考え続けられる人が求められているのだと強く感じた。それはアートマネジメントの現場だけではなく、人に何かを提供する事全てに共通することなのだろう。今後どのような道を歩めるのかはまだ分からないが、9ヶ月の学びを胸に、常に考え続けられる人間になっていきたいと思う。



大辻 祐(おおつじ ゆう)

明治学院大学文学部芸術学科芸術メディア専攻3年

インターンで学んだこと

私がこのインターンシップに参加したきっかけは、些細なものだった。元々、趣味でよく演劇を見ていた私は、劇場のチラシの中にあつた「あうるすぽっと」のこのインターンシップ募集チラシを見て、はじめてこのインターンシップのことを知った。それまで一度も自分では「演劇に関わろう」と自ら動いた事はなかったのに、どうしてかと今考えても不思議なことである。何故だろうと考えたとき、一番大きかったのは大学生という身分への焦りだったように思う。

やりたいと思ったことをやれるのは今しかない、だからやらないと後で絶対に後悔する。それに加えて、好きなものに真剣に向き合いたいという気持ちもあり、こうしてインターンシップに応募した。将来の仕事という意識よりは、このまま立ち止まっていられないからという理由が大きかったのも、やはり焦っていたのかもしれない。

研修に参加してからは、試行錯誤の毎日だった。区内のポスター掲示から始まり、公演チラシの折り込み依頼や作業、事務所での電話対応や当日の準備・受付など、どの仕事もはじめは右も左も分からず、分からない事はまず職員さんに尋ね、迷った時は他のインターン生に相談をし、とにかく目の前の事業に取り組むのに精一杯だった。演劇制作に関する知識も経験もなく（余裕を持って行動が出来るようになったのは他のインターン生よりも遅かった）、社会人としてのマナーや人前に出るときの態度なども未熟な中で、日々多くの事を学ばせて頂いていた。

その9ヵ月間で最も得難いものは、社会人として「働く」という意識であったと感じる。これはそう短期間で身に付くようなものではなく、9ヵ月という期間を失敗しながらも経験を重ねた事で身につけられるものだった。研修が終わった今でも未熟で、これから私がどこで職を得て働くことになるのかは分からないが、間違いなくこの経験は私にとって貴重な財産である。

また、アートマネジメントを片山先生や芸術の最前線で働く現場の方々から教えて頂ける講義の時間も、たいへん貴重だった。目まぐるしく変わる芸術をめぐる制度や法律の中で、現場や受け手に本当に必要とされている事は何かを考えさせられた。専門ではないが人々の生活に関わる大切な学問分野であるので、これからも興味持って学び続けていきたい。

ここまで振り返ってみてインターンシップに自分を駆り立てた焦りは、どこかここで学んだ「芸術」の在り方と似ている。明日も自分が変わらず健康に生きていられるという保証はどこにもない。だからそれならば、人生を楽しんで充実させていきたい。その為に「芸術」はあるのではないだろうか、と考えた。

貴重な経験と仕事をした他の7名のインターン生をはじめ、多くの方たちと関わったことは、インターンシップへの参加なくしてはあり得ない事だった。今はただ、この研修に参加することが出来て本当によかったという思いばかりである。

最後に、あうるすぽっとで研修をさせて頂いた間、職員の皆さま、片山先生、公演・ワークショップに関わった全ての方々へ感謝してもしきれません。たいへんお世話になりました。御礼申し上げます。



高橋 朋子（たかはし ともこ）

東京女子大学現代教養学部人文学部日本文学専攻4年

組織ではたらくということ

「公立劇場に対してどのようなイメージを持っていますか。」

インターンシップに応募した際の面接で、こう聞かれた。このことをよく覚えているのは、私はその問いに対してうまく答えられなかったからだ。公立劇場がどのような組織なのか、当時の私は明確なイメージを持っていなかった。

初めにやることになった仕事は、豊島区内に設置された数多くの掲示板に「にゅ～盆踊り」のポスターを貼るというもの。毎回出勤するなり事務所から自転車をひっぱりだして、ひたすら豊島区を駆け巡った。この仕事は、私の抱いていた劇場での仕事のイメージとはかけ離れたものであったので、なぜ私は立派な劇場を離れてこのようなことをしているのだろう、と考えるようになった。そして、あの問いを思い出した。公立劇場、あうるすぽっとは何をする組織なのだろうか。

「にゅ～盆踊り」では、豊島区内の7ヶ所の会場に出向いてワークショップを行なった。そして池袋西口公園に3500人強の人が集まり、盆踊り大会が開催された。私たちが巡った豊島区中の人々が一堂に会した。盆踊りを踊りに、アーティストに会いに、豊島区外からもたくさんの人が集った。「にゅ～盆踊り」は、劇場で活躍するアーティストを劇場の外に紹介することで、人々の交流を活性化する事業であった。あうるすぽっとは単なる劇場ではない。「にゅ～盆踊り」という事業を経験して、「人と文化が集う劇場（ばしょ）」というあうるすぽっとの理念が見えてきた。

あうるすぽっとという組織の理念があり、それぞれの事業の位置づけがある。あうるすぽっとの事業は幅広い使命を担っている——舞台芸術を創る人を育てる、あらゆる人々に芸術の楽しみを提供する、人々の出会いを創出し、豊島区を好きになってもらう。日々の業務を行なう上では、個々の事業の位置づけを考えることが重要であった。

ポスター展のチラシ制作の仕事が印象に残っている。この仕事で一番悩んだのは、見出しとなるコピーを考えることであつた。初めのうちは、ポスター作品の持ち味を表現するコピーを書いていた。しかし何度書き直しても決定しなかった。私のコピーは受け手の視点を欠いていたのだ。このポスター展は『あの頃の歌』という公演と同時開催の企画であり、中高年の来場を期待していた。事業の位置づけを見直し、対象を意識して、再びコピーを書いた。するとぼんやりとしていたコピーが明確な方向性を持ったものに改善できた。

そもそも公立劇場とは何なのか——この問いに戻ることに、9ヶ月間のなかで何度もあつた。あうるすぽっとの組織としての使命を考え、携わる事業の位置づけを見直すことで、組織の一員として自分がすべきことがわかってきた。

私は来年から、社会人として働くつもりだ。共感できる使命をもった組織で働きたい。大きな使命を果たすために何ができるのか自分で考え、既存の手段に甘んじず、挑戦をしていきたい。

9ヶ月間、お世話になりました職員の方々、片山先生、7人の仲間にこの場を借りて御礼申し上げます。



藤崎 香菜(ふじさき かな)

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論コース修士2年

9ヶ月間を振り返って

この9ヶ月、本当に色々な事を考えさせられた。3年生の夏に経験した、言われたことをこなすだけの一般企業のインターンシップとは大きく違い、あうるすぽっとのインターンシップは初めから最後まで責任ある仕事ばかりだった。

研修を通じて、電話対応やメールや送付状の書き方、組織の一員として働くという意識など、さまざまなことを学んだが、何より、報告・連絡・相談をすることが仕事をやっていく上でどれだけ大切かを実感した。私は静岡から勤務しているせいで、あうるすぽっとの事務所で作業をする時間に限界があった。だがはじめのうちは、東京に居られない分、家に持ち帰ってでも自分がやらなければという思いがあり、初めての担当事業の仮チラシを結果的に公演直前に仕上げることになってしまった。このままでは誰にも状況が伝わらないまま進行も遅れ、相談できる余裕がなくなるだけだと実感し、自分にできること・できないことを考え、協力してもらいながら仕事をするようになった。その後も情報の伝達がうまくいかずミスをすることが何度もあったが、情報のやりとりがどれだけ企画を成功させる上で大事なのかを身をもって体感することができた。また、自分が頼ったり相談したりすることが非常に苦手であることをこの研修で気づけたのは本当に良かったと思う。

またあうるすぽっとに通いながら、将来の職業として劇場の制作を意識していた。私は、子どもの頃にミュージカルに出演した事を契機に舞台芸術に興味を持ち、以後の舞台経験を通じて多くの出会いや経験をした。そして将来、自分が経験したような環境を与える側になりたいと思い大学も芸術文化を専攻し、実践的な力を身につけようとインターン研修に応募した。勤務を重ねるうちに正直、期待よりも不安の方が大きくなりアートマネジメントを仕事にしたいという思いは揺らいでいる。今後はもっと様々な作品やイベントに参加する側として触れてみたい。ここでの経験を活かして一社会人の立場からではあるが芸術に関わっていききたいとの思いに到った。

もう一つ、支えてくれる人たちのありがたみを実感した時間でもあった。仕事に分かってくる一方で、就職活動や卒業論文も重なり、静岡と東京を行き来する不規則な生活との両立が苦しいと感じて諦めそうになった時があったが、そんなときに話を聞いてくれ、応援してくれた仲間や友達、両親の存在に、今改めて感謝している。

学生にこんなにも時間や労力をかけて現場を教えてくれ、多くの団体やアーティストと素晴らしい経験ができるインターンシップは滅多にないだろう。これからもあうるすぽっとを筆頭に、このようなアートマネジメント人材の育成の場が日本全国に広がってほしい。

最後に、片山先生、あうるすぽっと職員の皆様、研修中に関わった全ての方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。



堀田 瑞季(ほった みずき)

静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科4年

9ヶ月間の経験から得たこと

大学3年生になり学校での就職ガイダンスも増え始めた頃、自分が将来何をしたいのか考えたが分からず行き詰っていた。そこで、なにごとにも経験しなければ分からないと思い、まだ時間があるうちに好きな「演劇」に関われることに向き合ってみることにした。そうして私はあうるすぽっとのインターンシップに応募した。今年度は8名という大所帯での研修となった。学年も専攻も異なるメンバーで、これから9ヶ月間協力していかなければならないことに不安はあったが、6月当初私はまだ研修について楽観視していた。いざ始まってみると、公演やワークショップの広報のため、チラシの折り込み先を探す、インターネットへの書き込み、また当日の進行の手伝いなど、やらなければならないことはいくらかも出てきた。さらに、事業は次から次へとやってきて、目の前の仕事に取り組むことで精一杯であった。そんな中で私は、言われたことだけをこなすだけでは意味がないことを痛感した。たとえば、「文楽」での広報に関して言えば、折り込み先を調べて依頼することはもちろんだが、地域の方々により多く来場していただくために、自分たちで進んでポスターを作成して区の掲示板に掲示を行った。「近所の掲示板を見て来た」という方もおり、わずかながら形として結果を出すことができた。どうしたらより多くの人に来場してもらえるか、参加者がより楽しめるのか、そして自分で考えて行動するという当たり前のことの難しさに気づかされた。

また研修中、チームで動く難しさを経験した。人手が豊富なことや多様なアイデアを出せることは人数が多いことの強みであったが、その分意見を集約することや、全員で話し合う機会を持つことは難しくなった。8名という人数を考慮すると、完璧を目指すだけでなく、効率的な方法を取ることも必要となってきた。また、一番悩まされたことは、情報の引き継ぎだ。顔を合わせて伝えることができれば良いのだが、必ずしもそれができるわけではなかった。ノートやメールを活用するなど工夫はしたが、共有のミスによる失敗も少なくなく、お互いに相手の立場に立って伝えることが重要だと感じた。

アートマネジメントや演劇制作に関して何の知識も経験もなく研修を受けていたが、片山先生や現場で働く方々から貴重なお話を聞くことで、僅かながらこれからの劇場のありかたなど理解を深めることができた。この講義を受けることで、事業に追われる日々で忘れがちだった、事業ごとの目的を再認識でき、すべきことが明確になった。あうるすぽっとで行う以上は、ただエンタテインメントとして楽しい事業を企画するのではなく「豊島区」の劇場であることを意識する必要があることを、少しずつ認識できるようになっていった。

長期間研修を受けることで、その場限りの体験では得られない経験を得ることができた。劇場やアートマネジメントについての知識を身につけるだけでなく、人として成長する場を与えて頂いたように感じている。まだまだ未熟なところは多々あるが、無事に研修を終えて9ヶ月前の自分から少しでも変わることができたと自信を持ちたい。



増田 友貴(ますだ ゆき)

白百合女子大学文学部国語国文学科3年

身をもって学んだ9ヶ月間

「舞台表現について学ぶことはどういうことなのだろう」。大学の4年間をかけて演劇を始めとする舞台表現について学び、大学院への進学を決めた私にとって、この問いは切っても切り離せないものであった。私があうるすぼっとのインターンに申し込んだのは、この問いの答えを出す手がかりが見つかるかもしれないと考えたからである。

この9ヶ月間は情報共有に苦しむ毎日であった。常に8人同じ情報を共有している事を求められていたのだが、なかなか自分の伝えたいことが相手に伝わらない。相手の伝えたいことが正確に理解できない。そんな状況が最後まで続いていた。しかしこの経験を通し、私は様々なことに気がつくことが出来た。そしてそれらは「舞台芸術を学ぶことはどういうことなのだろう」という問いの答えを出す手がかりとなった。

まず、相手に伝え相手を理解するためには、私と相手が違う人間であると本当の意味で理解しなければならないということだ。「こう言えばどんな相手にも伝わるだろう」「こういった考え方は皆同じだろう」などと心のどこかで思っていると、肝心なところで理解のズレが生じてしまう。これが正確に伝わらない一番の原因だったのだ。このズレを埋めるためにはまず相手の立場を想像し、自分の立場を見つめ直すことでお互いの違いを理解しなければならない。その上でお互いに伝わりやすい表現を選び対話をする必要があるのだ。そしてこれはどんな社会においても必要とされる基本的な能力である。今回のインターンでは、メールの文章や広報宣伝における表現方法など、どんなことを考えるにおいても、基本的な部分においてこの能力が必要とされた。私たちが携わった舞台芸術そのものも、この能力の延長線上にあるものだった。だからこそ9ヶ月が終わった今、違いを理解し、想像力を働かせながら対話をすることの重要性に気がつけたのだと私は感じている。

また、様々な事業に携わりそこに訪れる人を見つめることで「公共劇場があることの意味」について本気で考えることができた。人は文化を求め劇場に集い、文化を享受しながら他人と出会い、それらを経て新しい自分に出会う。この9ヶ月、そういった場面を数多く見てきた。恥ずかしがっていた観客が、しゃー隊に誘われ「にゅー盆踊り」を踊る姿。作品に感動し、去年に引き続き今年も見に来たクリスマスキャロルのリピーター。参加者全員で良いものを作り上げようと話し合う渋さ知らズワークショップの参加者達など。皆あうるすぼっとに訪れ、新しい自分に出会った人達だ。そして今回インターンとして関わった私達も、その一人である。私自身もここでの出会いがあったからこそまだまだ未熟な自分自身について見つめ直し、変わる努力をすることができた。こういった機会を提供することのできる公共劇場の、そして舞台芸術の可能性を身をもって感じた9ヶ月であった。

「舞台表現について学ぶことはどういうことなのだろう」。この問いに対し今なら「舞台表現を学ぶ事は、自分と相手について改めて考え直し、その上で相手に伝えるということ学ぶことだ」と自分なりの答えを返すことができる。この答えを大切に、今後もより深く舞台表現について学んでいきたい。またそれを通して社会人として重要な能力を磨き続けていきたい。

最後に9ヶ月間支えて頂きましたあうるすぼっと職員の皆様、片山先生、インターンの仲間たち、そしてこのインターンで関わった全ての皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。



松尾 元(まつお はじめ)

立教大学現代心理学部映像身体学科4年

9ヶ月の研修を終えて

今年度のあうるすぽっとアートマネジメント研修生は過去最多の8名であった。その仲間たちが誰一人欠けることなく、全員でゴールを迎えられたことを私は誇りに思いたい。ほとんどの研修生が学校では舞台芸術や戯曲などを専門的に学んでいる中、私の専門は家庭教育。インターンシップに応募したきっかけはたまたま大学の演劇サークルで制作スタッフとして活動していたこと、そしてそのサークルの先輩があうるすぽっとで研修を行っていた話を聞いたことであった。周り自分を比べては気負ってしまうことばかりであったが、そんな時にはいつもあうるすぽっと職員の方々やOB、OGの方々がアドバイスとエールをくださった。それをヒントに考え悩み、励まし合い、ともに喜んだ8名の仲間たちと築いた絆は生涯の宝物になるだろう。また、『季節のない街』では演出部の方々や役者の方々のお仕事についても間近で感じることができ、改めて舞台芸術におけるチームワークを実感した9か月間であった。

私は朗読劇『白い馬の物語』の経験が一番強く印象に残っている。劇場ホワイエにはモンゴルの伝統的移動式住居「ゲル」が出現した。そこでは子どもを対象に物語をつくるワークショップが開催され、講師のお話や馬頭琴の音色に合わせて子どもたちの表情が豊かに変化していくのを感じた。また、視覚障がい者の方々への介助サポートボランティアとして「劇場で出会うハートライン」の方々から客席やお手洗いへの案内誘導の仕方を学び実践を通して学ぶことができた。さらに公演期間中は毎回ゲルの中にお客様を集め、モンゴルについての説明を行なう時間を設けていた。その時に発表する内容は事前に資料を集めたものをわかりやすくまとめ直し、現地の言葉についてはモンゴル人の方々に発音やアクセントを確認していただきながら練習を重ねた。様々な人の立場に寄り添って思いをめぐらせ、最高のおもてなしをすること。そのために、時には叱られたり厳しい意見が投げかけられたりすることもあった。しかしそれらは全てお客様の笑顔のためであると考え、どんなに辛い状況にも負けずに走り続けることができた。あうるすぽっとで多くの人々に出会い、楽しい時間を共有できたことは非常に貴重な経験であった。

何かに対する憧れの気持ちがきっかけとなり夢や目標が生まれ、人は豊かになっていく。それは舞台上に立つ役者から客席への関係も親から子への関係も変わりはない。ここで私は自分の専門である「教育」と芸術の結びつきを再確認することができた。今後自分のやるべきことや課題も見つかった。あうるすぽっとでの研修から、私自身も体力的、精神的に一回りも二回りもたくましく成長することができたと思う。研修最初の事業『にゅ〜盆踊り』のポスターを掲示するために、地図を片手にわくわくしながら豊島区を駆け回った時の気持ちを忘れず、これからも向上心を持って挑み続けていきたい。最後に、あうるすぽっとの皆様、9か月間本当にありがとうございました。



山崎 愛美(やまざき まなみ)

日本女子大学人間社会学部教育学科3年

編集後記

2012年度は、あうるすぽっとにとっても日本の劇場界にとっても大きな転換期となる年でした。2007年の開館以来、陣頭指揮をとってこられた松島支配人に代わって、岸支配人が着任され、新体制がスタートしました。そして、6月には劇場・音楽堂の活性化に関する法律（通称：劇場法）が制定・施行され、劇場の定義や目的が定められました。そこで規定された多くの事項はこれまであうるすぽっとが実践してきたことです。こうした中、今年度のインターンシッププログラムは、様々な分野を専攻し、学年も学部2年生から大学院生までの多彩な8名のメンバーが取り組みました。例年は様々な理由によって最後まで続けられない研修生がでてくるが多かったのですが、今年度は8名全員が最後までやりとげることができました。8名のインターン生はこのあと様々な方向に進みますが、公共劇場というものが社会の中でどのような役割を果たしているのか、またいくべきなのか、という点について自分なりの認識をもった市民となって活躍していただくことを願っています。

片山 泰輔

平成 24 年度

アートマネジメント研修事業報告書

発行日 2013 年 3 月 31 日

発行人 公益財団法人としま未来文化財団

あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 4-5-2 ライズアリーナビル 2・3F

Phone 03-5391-0751 <http://owlspot.jp>

編集 あうるすぽっとアートマネジメント研修生

監修 片山泰輔

©2013 OWLSPOT



あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）

公益財団法人としま未来文化財団